
時報

No. 3

1952. 2

大阪大學山岳會

目

次



第七号

- 一 偶 窓 谷長 篠田軍治……………(2)
- 二 秋等の歩み―回廊と展望……………(43)
- 三 一九五〇年 夏山より……………(4)
- 南 股 概 説
- 一九五〇年 冬山より……………(10)
- ベニヤ板に就いて
- 一九五一年 暮山……………(12)
- 後立山 逆縦走
- 一九五一年 夏山……………()
- ↳ 鹿島糖カクネ堂……………(17)
- ↳ 登塔 記録……………(39)
- 一九五一年 秋山及公冬山……………(41)
- 丸岳バツトレス、頂上昇皆、鳳凰山
- 一 山行記録(一九五〇六月―一九五〇八月)……………(47)
- 二 集会記録(一九五二四月―一九五二九月)……………(64)

偶 感

篠田 軍治

(二)

七月の始め学生と一緒に道場へキヤンズに行つた。夏山を前に控えて百丈岩でトレーニングをするのが目的である。土曜日の午後から出掛けたが、出発前から突如降られた天気は夜半から崩れ、翌、日曜日は相当な降りになつてしまつた。屋根型の八人用と四人用を一張りつつ張つたが、どちらにも相当に雨漏りがする。勿論、戦前のもので何處も修理して、防水も不完全だから雨漏りは当然である。フト「この天幕はあまり漏らないな」という声か耳に入つた。自分は耳を疑つた。自分が相当な雨漏りと思つていたところへ、つまりこの天幕でもつとひどい雨、それに風が狂つたら相当なものだと思つていたところへ、こんな言葉か耳に入つたのでいささか驚いたが、考えてみればこれは当然のことである。自分

の現役時代というと、既設の山岳部へ入部したのは高等学校の時だけ、それも二月に出来て九月に入つた。だから現役時代に古い天幕を持つて行つた経験がなかつた。阪大山岳部に関係してからも戦前は毎年天幕を新調したり、修理したりしていたから相当な暴風雨に会つたことはあつても、ひどい雨漏りで困つた経験が少い。だから戦後の補修の不完全な天幕の経験しか持たない現役と雨漏りに対するセンスが全く違つていたのだ。こんなことに今頃になつて気がつく自分の迂腐さも相当なものだが、雨が降つたら天幕は漏るものと思ひ込んでしまうのも考えものだ。夏山の教習などを聞くとき大した雨でもなさそうなのに防雨衣を濡らした話を聞くことが多いので、どうしたことかと思つていたが、どうやら雨が降つたら物を濡らすのは仕方がない。そこまで行かなくても濡れることを気にしないことにも原因があるようだ。もう少し工夫したら

それ程濡らさなくても滑むものを全部濡らしてしまふということがないであろうか。

雨の問題に限らずこんなものだと頭から思いこんでしまふのは危険である。足は靴の中をかたくするもの、靴は楕円から直ぐ外れるものと思つていてはスキーは上達しない。山党が前傾バンドをして山へ登つて行くゲレンデスキーヤーを笑う前に、山党にも及指すべき者は多々あるう。

これと同じようにきまつた方面の山ばかりをやつていると、山登りというのはこんなものだと狭い、誤つた観念を持つてしまひ勝ちである。今年の栗山のカクネ合宿では山に吞まれてしまつた美がありはしなかつたか。これは従来、対象にしていた山と性質の違つたところに行くとなつて勝手が違ふことだから来る心の動機が原因であろうが、その又原因といふのが山はこんなものだと思ひ込んでしまつていたのがぶちこわされるためである。だから現

後時代に南アルプスのような北アルプス北部と全く性質の違つたスケールの大きな山、しかもそこへ入つておくのも悪くないと思つて今年の合宿を北岳に持つて行くことに賛成した次第だ。毎年行つていた冬の後立山にも勿論未解決な興味ある課題は多々ある。然るに今年の対象を南アルプスに求めたのは、嚴冬の後立山だけへ行つていると、人によつては何年行つても本格的なアイゼン、ピツケルの世界を味ふことが出来なほ怖れがあるし、きまりきつた天候の下での行動に馴れ過ぎると当然注意すべき美がつかい忘れられ勝ちになる怖れがあるので、これを避けるためでもある。例えは凍傷の注意でもさうである。風の強い寒い日や、吹雪（風雪と違ふ）の中で行動することが少いだけに顔面その他の凍傷に対する注意が不足になり勝ちである。寒さについてと同じことが言える。北と南では寒さの性質が違ふ。だから北で鍛えただけでは違せ

嶽①)にまとめられてゐる。地理的に南嶽と
 言えは白馬山麓ニ賦に於いて合流する杓子、
 樋、不歸、唐松方面よりの沢を指すのである
 が通常南嶽よりする登山は天狗の犬下りより
 不歸、唐松東嶺、八方尾根方面に限られてい
 る。之は余程の大雪の年で無いと穴左三門の
 滝が春も埋らず天通しは通れないので南嶽を
 根嶽として杓子、樋方面にはるはると小口匂
 山を越えて行くよりは、むしろ猿倉小屋を根
 嶽地として杓子双子屋根のゴル(双子岩附近)
 にテントを張り杓子、樋の東面を登つた方が
 良いからである。甲南、関字の杓子の東壁、
 ヤリの北山稜の煙やける登攀(文獻⑤⑥⑦⑧⑨)
 や一九五一年春の京大⑩のヤリ南及び北山稜
 の登攀も全て後者の方法を採用してゐる。
 無雪期に杓子、ヤリ東面を登るのなら南嶽
 よりもう少し少レキヤンプを進めて杓子沢の出合
 かヤリ盃泉を根嶽地とした方がよい。例えは
 十一月のヤリ北山稜(町大西尉氏⑪)八月の

南山稜(根高⑫⑬⑭)の初登攀はどちらもしそ
 うしてゐる。

以上の如く南嶽翼の登攀史は南嶽を根嶽と
 する限り不歸方面が主要な目標となる。

甲南に繞いてその流れをくむ大が此の方面
 に入り、又大高及びその流れをくむ阪大等が
 南嶽を(山)として登攀を試みている。前記
 田口氏の文章と共に(①)にのつてゐる「不
 歸の峰ニ屋根」の写真を採一尾根より横影さ
 れた小山茂一氏は東大山岳部の方なので東大
 山岳部も甲南出身の田口、伊藤兄弟等と共に
 此の方面を相当登つてゐると推定出来るが残
 念ながら記録を見ていない。

所で積雪期の南嶽と言つても成功した主要
 な登攀は全て春に限定されてゐる。之は例の
 剣と後立山の冬季における悪天によることは
 勿論であるが、それに加えて南嶽出合を *Bade* と
 する時は両岸のきりたつた谷底を取附矣迄登
 前とラツセルに踏みながら長い間歩かねばな

らないうつ、狩務事情も知るのである。田口一郎氏は昭和六年正月の記事として(① 四八頁)

「惣ごしに見る不歸の岩峰は心をぞとる。だが途中の深い南麓の谷は雪崩か溜る溝のようなもので春のクラストの時期でなければ通る氣も起らない。鍾岳や杓子岳も六左衛門の境が此の雪量では通れそうもない以上尚類にならず、今の処は正面の八方尾根から鷹松岳に登るのが一番良さそうである」と書いていられる。若し冬の不歸東面をねらうとすれば野口兼一氏等の大阪兼専が試みた如く八方尾根にテントを進めることをBCとする方が勝つていと思われる。まことに十九百三十九年正月は此の方面の冬期登山史に於ける一つのクライマックスであつた。即ち八方尾根には前記の如く不歸ニ峯東面をねらう大衆、同志社の合同パーティが居り、南股には大馬と神カ爾大がやはり不歸と目標として居り、双子

(六)

岩附近には岡学が杓子、鍾をねらつてテントを張つた。(②) エーデルワイス(③) 然し何れも悪天の爲成功しなかつた様である。

春期に於ける不歸東面の最も輝ける登攀は甲南田口一郎、伊藤新一両氏の峯ニ尾根(千九百三十三年④) 阪大中條徹、島雄昭美阿氏のス峯の壁直登(④⑤) 甲南小川氏等の第一尾根(⑥) (千九百四十一年四月一日) であらう。後の二つは戦時中の爲とちらも記録が私的なもの以外発表されていないのは甚だ残念である。中條(理) 島雄(医) 両先輩の記録は千九百四十年四月一日南股を根據地として不歸東ニ峯を甲南と反対に三峯側よりとりつき直登したものであるが、その年の夏中條氏は大馬と共にやはり此の南股の袴帽子尾根を登攀行遭難死され、島雄氏又戦死されたので、一端を中條氏の遺輝録中にうかがうのみに直接に詳細をお聞き出来無いのは残念である。八方尾根よりニ峯の壁をみる度に一体と

こをどう登つたのみしらと思つのである。

以上の他に甲南は半道岳の直登を行つて居るか(⑦)此の^{part}には現在理学部に居られる

岡集三、山口岩太郎両先生が参加されて居る。

次に夏の南股であるが私の知つて居る限り

では日本登高会と大高が入つて居る。日本登

高会の上田敏雄氏の書かれた「山小屋」103号

⑧の夏の不歸東面の紹介は良くまとまつてい

るし、私達も各林は全て自代に從うことにし

た。大高も数回入つて居り⑨によれば中條氏

は築ニ峯壁直登、築三峯A次へ上田氏のムル

ンゼ?」鳥帽子尾根を登つて居るが、ニ峯

の壁も夏は大して悪くはない様である。

▽ 根 拠 地

・夏の^{Ball}として大高は我々の如く取入口附近

にテントをばり、日本登高会は谷通し登り南

境の上にテントをばつて居るか我々の経験で

は之は不適当と思う、年により大夏異なるら

しいが大高の記録によつても従来衆に登れた

谷筋が昭和十五年夏にはすつかりあれて非常

に悪くなつたとある。私達の入つた千九百五

十年夏もやはり非常に悪く南境迄の十四位の

徒渉は水も大夏冷たく登攀前の調志をにぶら

せた。又南境をまく時記録の示す如く落石の

危険が大であり、その上やつと岩場にとりつ

くのである。アプローチは大夏長く取入口附

近の高度は一丁度千米で尾松は二千七百である

から高度差千七百米、水平距離は約五kmであ

る。徳高でいえば横尾岩小屋を根拠地として

北穂高、滝谷の岩場を対称に往復するのと全

く事情が同様である。それより悪いのは筋路

八方尾根から直接テント迄下る適當な道が無

い。我々の昨夏の記録が雪沢、ルンゼの登高

にすぎないのに、途中でビバークして居るの

も理解して貰えよう。今後夏の不歸東面を目

標とする時には八方尾根より入り、水、薪に

不便であるが八方地附近にBCをばり、適當な

(六)

尚原稿をかく途に求大・大町の記録及び甲南の戦時中の記録の調査が十分完全には行い得なかつた。

野ノ用 大 新大

下降路をみつけて不帰沢と鷹松沢の出合附近をACとすると良いと思う。此の場合には二、三人用の岩小屋があり、狩人が使用するらしく茶碗がころがっていた。(然し細野の中村実氏は此の岩小屋の存在を知らぬらしかつた) 此處をACとすると嵩度差十四百、水平距離二Kmとなり、個沢より菟谷を往復するよりや、大となる。未開者の黒部側を目標とするには鷹松小屋附近が根據地として良いだろう。

積雪期の根據地として南股取入口附近は人里に近く八方尾根の如く極風雪により連絡が途絶する心配も無く生活も容易という利はあるが今はやはり八方尾根にテント又は雪洞をつくり根據地とする方が多くなると思う。

最後に夏の南股は若右の危険が大であるから充分注意して欲しい。我々も不帰沢を登つてゐる時し霧の向より小千位の高からリバーが下り滑り落ちて来たのには全く驚いた次第である。

- ① 「上 野」 31年2号 ②④
 - ② A.A.V.K. 野ノ用ノ号 (1939年2月)
 - ③ A.A.V.K. 報告4号 ⑤
 - ④ A.A.V.K. 野ノ用ノ号 (1940年6月)
 - ⑤ 野ノ用 (中森氏野ノ用録)
 - ⑥ 甲南野ノ用田誌ノ号による
 - ⑦ A.A.V.K. 報告5号 ③⑥
 - ⑧ 山ノ用 / 03号 (1940年8月) ③⑥
- A.A.V.K.は関西学生山岳連盟の略称
- 野ノ用 *peace* 及び近野南北山林の文献
- ⑤ A.A.V.K. 報告8号 ⑤
 - ⑥ EDELVEISS / 0号 (國字報告)

一九五〇年十二月（冬季構子尾根合宿）

ベニヤ板マツトについて

関西学生山岳連盟の時報第八号（昭和十年）によると、如藤文太郎氏がベニヤ板を丸く捲いて持参しマツトとして使用している。マツトの少い我々も構子尾根の合宿に使用してみた。

ベニヤ板は川島の家にあつた三板ベニヤのや、厚目（3mm位）のものを五十程平方位に切りニ枚を一人分とし、一方の両隅に穴を明けニ枚を紐で繋いだ。ベニヤ板は濡れるとはがれ易くなるので、防水だけは完全にしたいと思ひ美津濃技術研究部の新保光雄に御相談して塩化ウニールで殆ど完全に防水して頂いた。但し鹽気炒で乾燥する時こげ易いので注意を要する由である。又特に側面の防水を良

(10)

くする必要がある。比叡の爲にペンキを厚くぬつたもの及び美津濃製スキーラッカーを塗つたものも作つたが之等は使用する機会が無かつた。塩化ウニール防水のものも始めは人数の多で必要がなく後からテントに上げたので、僅か三日間使つたにすぎず十分研究したわけではないが、今後の爲に結果を書いておく。

マツトの條件として稲門の岡根吉郎氏は次の四つをあげている。（山岳研究講義Ⅱ、明文堂）

- 1 防水性、下からのしめりを防ぐこと
 - 2 断熱性、ぬるること
 - 3 軽く、塵埃に便で耐久力あること
 - 4 上に物を置いても安定せしめうること
- さてベニヤマツトは前記の如く防水したので第一の條件は良く充した。カボツクの如く除々に湿つてくることも無く、テントに歸つて来た時入口や放出の所において塵が落ちる

と道々外へ出して掃うとすぐ落ちて便利だった。

その断熱性は我々の使用中は不便は感じなかつたが、ヘヤー、ロツク、ヤコルクと比較すると劣ると考えるのが常識であろう。

③ 重量は一人分が15磅でカボックと略等しい。湿つて増量する事が無いとは良い。何より便利なのは容量小で教人分をまとめてルツクの上にしばつて運搬出来る事である。耐久性は側面の防水を注意すると十分である。思うが、ベニヤ板の安価な点から耐久性はそれ程考へる必要は無い。

④ 安定性は他の何のものにも勝る。實際カボック等は教日も滞在すると真中がへこんでラゲウスが不安定になつたり寝にくくなつたりするがその心配が無い。

⑤ 費用は一人分百円弱で出来るのが有難い。又すぐ手製出来る点も便利である。

結論、安定性運搬の容易な事、防湿性、費

用は他のマットに勝るが、断熱性はどの程度のものか長期間使用して研究する必要がある。ベニヤの接合剤も最近の高分子合成品を用いておれば、水に対し側面を大して心配する必要は無くなる。マットとして使用しなくても大きな計画の時はラゲウスの下敷及び出入口に敷くと便利であろう。

尚敷直街入36により福岡山の会が板マットを使用している事を知つた。板の材が何か尋いて無いが、 $\times \times \times \times$ 、 $\times \times \times$ 、 $\times \times$ の板のピースを防水塗料仕上で紐で連結して適當な長さにして用いていられる所である。ベニヤ板ではピースにしない方が良いと思う。何故かと言うと一枚板でも運搬には因らぬし、ピースにする側面が多くなり弱味が増ねする上に前述の安定性等の長所がなくなるからである。福岡山の会は撤収の際にフアイアーにたいしてしまふとある。

又武政は今香劍Cでグラントシート代用に

ベニヤ板を使用し防湿になる程度であつたと「山」の月号に記してある。マットは「ヤ」ロツクを使用した様である。

敢後にお世話になつた美津濃の新保先輩に厚くお礼申し上げます。

一九五一年三月

——后立逆縦走計画の失敗——

終戦后、私達が部の充実と高揚の全てを賭けて目指して来た目標は横巻季に於ける后立山の縦走であつた。后立東面を主とする冬の合宿や一九四八年春の八方——麓島槍の狂狼の岩に断くこの計画は具体化された。

私達が計画した后立逆縦走の原案は次の通りである。

〔A〕 加藤、川島、坪井、大久保（OB）

〔B〕 CL 徳永、松久、細見
（三月二〇日以后細見A隊に編入）

〔C〕 L 大島、尾藤

以上の三編成の下に、Aは大沢より針の木——小舎へ雲河前進、Bは麓島より小舎荷上げ、Cは八方より唐松小舎に入り、A、Bより横抜のニ、ス三名の縦走隊を迎える。縦走隊は晴天を待つて唐松より一気に麓倉へ、という骨子であつた。

本計画は三月十七日より実施されたが（詳細記録）サボートの配置も終えた後、三月二十二日にA隊の坪井がスリツプし負傷した爲に中止された。計画を中止した事は正しかつたけれども、スリツプを機として幾多の誤りが計画自体の上に反指されなければならなくなつたのである。例えは訓練のために行うという見地からすれば縦走計画はサボートの長期の符號、補充食糧等の呉に於て必要以上の出費と日数を伴う採に考えられた。又一面か

ら云えばこの事故の後の行動は我々の意を強
くするに足るものであつた。本登山につい
て記すべき事も多いが、ここにはその反省と
事故当日の隊員の手記を記し、詳細は巻末の
記録に述べた。

(徳永記)

春季後立縦走計画失敗に対する反省

後立縦縦走を試みに我々は針木こつまづい
て能気なくも計画を断念せざるを得なかつた
がこのアクシデントの原因を振り返る必要が
あると思はれるので一言敢にのべてみたい。
直接の原因は重荷を負うた体で黒部側の急
斜面とステツプカントせず斜に降りつつあつ
た事にあるがこれは全くリーダーたる私の責
任である。一の落下地点に至る迄の我々の行
動を考へてみると肉体的疲労は相当大きい様
である。即ち明かに無理をしすぎてゐる所であ

あつた。

大阪―松本―大町間夜行列車にゆられ大町
で五六時間居ただけであり、この間も出張準
備に忙しく更に午後々時頃大出から大沢迄強
行したのであつた。種々の事態からゆゑされ
ないかも知れないが大きな山行をやる前は少
くとも一日山を前にして休む位の予備は今後
必ずとする事にした。大沢小倉の不備な生活
はこれに拍車をかけ翌日は一日雪で休養して
いるが過労が回復してゐなかつたのである。
又我々の期待してゐた針木小倉が完全に雪が
つまつて使用出来ず遠看けなかつたのも一つ
の因子である。然し小倉から針木岳頂上迄
の積雪が最も体に大きい疲労を与へた事は同
達にないし頂上の烈風が丁度晝飯時の我々に
食欲を起させなかつた事は後から考へると惜
むべき天の仕業と言へる。私は針木―スバリ
間の最低鞍部で徳州側に風を避けて昼食をこ
るつもりで先を急いで降りていつた。現場は

黒部側を少し捲き気味に下る所であるが確に最悪の所であつた様だ。足首に自信のある私はすたくと降りて行つたが他の隊員に注意を与えんとした突進の間に下は落ちたのである。私の行動を見て油断した下の一歩足が不慮の結果を起した事は全く私の罪と云えるのであつて、隊員各自のコンデিশヨン及びテクニツクを絶えず念頭に置いて行動する事が如何にリリーターとして重要な事か痛感させられる。我々の持参した装備についても考へるべきは幾らでもある。一本のガイルし持たなかつた事は何としてもいけない。

アフシデントの後の隊員の行動は良くやつて呉れたと思つてゐる。特に大久保先輩の適切な治療は全喘の倦類を置かせるものであつたし連急に毛覆した細見、大久保氏を助けに川島の手廻りは目ざましいものがあつた。医学者の参加がかくも尙雅い事とは不覚にも始めて知つた次第である。

要するに今宵の失敗は許す所のものに大きな文障があつた杯である。例へば大沢遊はサボートさせなければならなかつたが如きである。然し多くのアフシデントは起るべくして起るのであるという事及び我々の行動の中には平素は見逃がされてはいるが一度事故が起ればそれと指摘される様な多くの危険性を含んでゐる事は深く胸に刻みこまねばならない。

(加藤 記)

事故当日 (手記より)

三月ニニ日(晴午後雪)三〇〇起床・四〇〇
 本營雪面はクラストしていて殆んどしぐらなかつた。ランタンに照らされた五人の影が中
 れて居た。吾々がこの谷を登るについて最も
 注意したのは雪崩であつたけれど何回も絶
 いた晴天の後なので出るべきもの水蓋したの
 か吾々の大沢帯在中その音一つ聞かなかつた。

今歩いてみても全くその憂はなく、古いデブリを棄越えるのに少しばかり苦勞しただけであつた。新しいのがスバリから出て居たか向懸にならず谷の中央迄送して居なかつた。その中夜が明け始め、マヤクボのあたりで全く朝になつた。振返つて見る後立の峰々は朝日に輝き、白と赤と青とそして黒々とした岩の織成す色感はいかにもすかしく、しい。此処から針ノ木峠迄は40度以上の斜面が數百米続いて居る。左岸よりに眞一文字に登つて行つた。雪庇を嫌つてその右側に出ようとそのまま左岸をたどり、黒部から送られる吹き溜りをラツセルし、ハ〇〇殺線へ出た。とたんに猛烈な風と雪煙に出迎えられ小屋に逃げ込もうとしたが小屋は天井迄も雪がつまつて中に入る事は雪洞を掘る様なものなので天気の良いの幸い迄の中でみぢめな朝食を攝る。

兀〇〇何か物足りない様な氣持で出發すぐ殺線に取附いた。東向の屋根は太陽の直射

を浴び雪がゆるんてかなりのラツセルをしなけれはならない。思つたより急峻なりツゲを交代してラツセル。くさつた雪と露出した岩との混つた悪場では30分以上の時間をかけて數メートルも行くか行かぬであつた頂上より一つ手前のピークの有迄来てベルグシユルンドに阻まれて取付の岩が越えず遂に信州側をトラバースする事にした。予想と反対に雪の狀態はよく足首迄しかもぐらず全裝備を荷つて居る吾々は仰い岩場を行くよりすつと氣が楽であつた。衆々と頂上手前のマル五行けた。マルからは雪の壁が頂上へとニ枚に続いて居るが蹴込みとピツクルで切つたハンドボールで滑なく棄越えた。そして一二〇〇針木岳頂上に着いた。天氣は下り坂であつたので少し休んですぐ出發した。リツゲを下り、それの切れた所から左へ下り黒部刷斜面を十米ばかりトラバースして再び圍境線へもどるのである。此処で我々の計画にとつて致命的な事

故をしてしまつた。此の斜面は非常に急で、且つがしていてそれが露出して居る所があり、雪は固くクラストして居る所とくさつた所と、谷と合し黒部川迄差込んで居る恐ろしい所であつた。オーダーは私がトツプ迄か加藤、大久保、井、細鬼の順であつた。中程迄来て私は進めなくなりステツアを切り始めた。それに加藤、大久保が私を助けようとして私の下をまかり前へ出た。その時突然坪開スリツプに転倒、滑走して行つた、くされ壺に右足をかけ、体重を移した時、足場がくづれたのである。振返つた時既に横倒しになり危険な姿勢で求米滑り落ちていた。何もなく横転しなからピツケルと縫れ合いゴロく、転がり數十米着ちて露出したがレで停止した。残りの四人は、始めの中こそ「ピツケルノ、ピツケルノ」と呼ひかけていたけれどもその中樺の様に突立つて唯見守るばかりであつた。

停止した彼が少しばかり体を動かすのを見た時は縮まつた壽命が再び元に帰つた様な気がした。もう一米後か前でスリツプして居たら巨岩に体をぶつつかるか或は黒部迄着ちて行く所だつた。直ぐ加藤、大久保、細鬼が下りて行つた。私は荷物の番をして居たがこの頃より天気は崩れ、風が吹きつのもり雪ささまじえて寒くてしかたなかつた。負傷者は直ちにスベリとのコルに運ばれ岩の向でソエルトとシユラーフに守られた。我々は徳州側へ五米程下りた所に雪洞を掘つた。作業半ばにして坪井がしきりに寒さを訴えるので雪洞に移してそのかたわらで作業は続けられた。全員が腰を落ちつけたのは10時をまわつて居た。細見と私は炊車をし、大久保、加藤は手当にあつた。傷は右股付根をピツケルでえぐつたもので出血は相当あつたが動脈は外れていた。他顔面や頭部に擦傷や裂傷が所々あつたが大した事なく精神的シヨックが弱つて居る最大

原因らしかつた。手当一切は久保先輩にやつて戴いたが当然の事とは云え有難かつた。手当がすむと乘になつたらしく物も食べ元氣になつたので不恰好な雪穴の中ではあつたが急に皆ほがらになつた。20時折り返つて就寝。

三月二十三日(雪後晴)昨夜雪が降りつづいたらしく緩かつた雪洞の壁や入口が分厚くピツケルを突込んで外迄とどかない。シヤベルで掘つて息抜きを作り空模様をうかがうとどうやら雪は休んだらしい、下山の腹を決め用意したがぐすくすくしている中に時が経ち外に出たのは6時であつた。最大傾斜線に沿つて真直ぐに下りて行つた。湿潤新雪で跡途もぐるラツセルだが下りの事として何でもない。細見と私がルートを開き細引でつなぎ合さつた如藤、坪井、大久保が続く、雪崩の恐れは充分あるのに後の三人は情けなくなる程道はない。8時に私達二人は大沢小屋にもどり、

細見は炊事を始め私は直ぐ迎えに行つた。19時無事小屋に全着いた。相談の末、如藤細見に連絡に下つてもらう事にし食事と休息の後(二四二五)二人は月明の宇を里へ下つて行つた。二人を送り出してから坪井の手当をし石放後にもう一つ傷のあるのを発見した。

(川島記)

夏の鹿島槍

カクネ里

家

田

イ

三

一九三〇年頃から幾多の先駆者により、無雪期更には積雪期に開拓せられた鹿島槍北壁は、戦前関東、関西各学政山岳部の集宇を受けて居たにも拘らず、主役の積雪期登攀が軒

決するや、戦は更に訪れるものなく、因雪、
 根雪等により、僅かにトレールをさしたにすぎず、
 北アルプスに難路に比し、現在は静寂そのものを
 誘つてゐる。之等北壁の域に到達せんと努
 力する者々、その昔彼等の情熱を頓倒した
 北壁を再検討する事も無駄ではなからう。種
 々の記録及び我々の一九四三、一九五一年度
 の合宿記録により、先蹤者のトレールを辿らう。

地 形

カクネ里は、根雪北麓を起るとし、右立後線
 と天狗尾根により固まれば、北東に勾う、略菱形
 の山容である。大川沢は北麓から東に派
 成する天狗尾根が、遠見尾根に迫つて極端に
 狭められた。白岳沢とカクネ里に二分す
 る分岐處に、夫々滝が有り、周囲の如くその
 入口に控えてゐる。せせがれが細い雪渓で主
 に左へ、右へはすべ下から之を見上げ
 て云うから、大きな支流を受け折れ曲りな

から続いてゐるのに比し、カクネ里は北壁全
 体に等分に掘深く喰ひ入り、数分からハット
 レスと雪渓は一壁の中にある。入口の狭さに
 くらべ、餌はカスのヴェールに、北壁は見えか
 く、北に源流地的な幾分のびやかな気分をか
 し、昔平家の残堂がかくれ住んだと云う伝説
 も又宜なるかなと思はせる。出合より見るハ
 ットレスは上下二段に分れ、上部はブツシ
 帯の露色に下部は黝ん、岩壁が雪渓に続いて
 いる。北麓を中心とし、大小のかりりがリッ
 分をはさんで、左右斜めに下り、やがて雪渓に
 向つて雪渓上端を抱き込むか、如きカーブをな
 して落ちてゐる。左肩には見上げるばかりの
 天狗尾根が、稜上に迫つて来てゐる。出合から
 カクネ里中標部迄は、左の天狗尾根は約十本
 の沢がすべて、浅く残雪をこく僅かに上部につ
 け、急傾斜でカクネに落ちてゐる。右立園境
 線側は、キレツト沢に至る迄、口の沢、中の沢
 の二本の大きな沢を入れ、その間の尾根も相

当大きい。口の天はカクネ本谷に真りない
皿の長さを有し、最上部のかし場は持微助
だ。右立線側は、下部は猛烈なブツシユ
で、上部は差質もろく、従つてカクネ里は
雪溪の左側は平坦な所は少く、右側は緩傾
斜で暗は広いがブツシユの爲峡適なギヤマ
サイトは極く限られてゐる。

通 路

従来三が計えられてゐる、即ち

一、大川沢湖行

一九〇八年七月三校氏が此処を下られた（
冠氏右立山、建峰）相であるが、一九一八
年浅井氏が初めて湖行して白岳に到られた
（山岳十五年一号）。その後一九三〇年頃
から立教、神戶商大、K.C.C、京大、東京
商大、甲南等が入られたが、京大は天狗尾
根剣を基たしく高廻りを余儀なくされ、之
はトレースするルートとは異なされない。

此処に東京商大、小谷部氏の記録をあげて置く
ルート図も同氏のものである。「殆んどが白
岳沢を下降してゐる様であるが、八月中旬迄
大した困難もないから、どうせ二日費やすな
ら此処を避んだ方が楽ではないかと思ふ。殊
に六月中旬頃迄なら雪溪が二候下流の険悪な
河床を蔽い、更に下流もスープリツゲが如く
にあるので一層容易である。尤も豪雨等によ
る増水時には絶体困難だからどうしても他ル
ートに依らねばならぬ。蘆野森林小舎から大
川沢左岸の林藪はやかて消え沢伝いの湖行が
始まる。大体始めの内は一寸悪い所でも高廻
りしないで徒歩する方が案で早い。左左に差
り返して進む母に沢は西方に弯曲し傾斜も急
になる。やかて両岸は険しい岩壁になり扉下
状を呈して来て滝や深淵の爲どうしても高廻
りを余儀なくせられる。だが早いのは前後
二、三回で大地獄小地獄の名所がある相だが
よく分らない。二候近くにあると左岸が非常

に悪く左岸が一帯におとなしい草付で河床から二三十米の上を築に捲ける様になる。更に右岸の草地を少し捲き岸壁にぶつかると一旦河原に降り右岸の木が生えた草付を登れば築にカクネに入れるが、河原からこの草付の取付きが悪い。而して河通しに行くのは相当のアルバイトを要し、水を併けて天狗尾根側を捲けばアツシエに溜されていたづらに時間を喰う事必然である。而して今夏(一九五一)鹿島部落で聞いた所によると林道は更に大川天上流迄のばされる相であるから、やかては衆なるトトとなる。なほ我々の二股から鹿松窪附近迄の調査記録があるから本文を参照されたい。

二、白岳天下降

最も適当と思はれるルートである。白岳の南の鞍部(恐らく白岳小屋は此処に建つのであろう)からすぐに広い雪渓の上を二股出合に下るもので、傾斜ゆるく長いだけで遠石の

危険もない。カクネとの出合のすぐ上は雪渓は続き出合の十米程の滝は左岸を捲りぼくは七月中旬迄は滝も些に埋まり築々と下れる。出合からカクネに上る滝も右岸を捲いて越せる。カクネは天通しに左右両岸とも歩けるが左岸は出合より二百米程上流で一ヶ所高廻りを要する。鹿松小屋を朝出れば合宿用全装備を持つてもカクネ小屋マースキヤンア並りつくり一日コースである。遠見尾根の如きか出末札は(今年中に出来る予定であつたか)小遠見から正面に北壁カクネ里を一壁の中に、收め得るし、国境線迄登らずに大遠見の上から白岳天に下れるので労力も省ける。

三、キレット天下降

カクネ小屋の核心又国境尾根から下るこの雪渓は上部で三分する。この中中天的が通路になる。之はキレット小屋よりすぐ北のピーク

を一つ越した鞍部から下るものでユルからカク木側に十米も下ればすぐ雪渓だ。七月下旬迄は切れないかそれ以後で切れた場合には大体北側(五重側)のシエルクドに入ればよい。上部は相当急傾斜であるから荷物が重ければ注意を要する。グリセード三十分程でカク木の本谷に入れる。此のルートはバツトレス登攀にベースキヤマブに下るものとして用いられる。下部は落石に埋められているか之は左右の分岐した雪渓を落ちて来るもので、何れからしも天候に拘らず落石がある。

根 據 地

一、キレット小舎

之をベースにする時は上記のキレット沢を下降してカク木に入る。而し夏季は稜線を縦走する人が多く小舎は狭いからお互いに迷惑にならぬ様間歇期間中は遠慮すべきであろう。而し六月頃なればカク木本谷は雪に埋めつく

されるので、雪上にテントを張るより此処を根據にしてキレット沢を一気にグリセードで下るのが好いであろう。天候の悪いカク木里の合宿で暴風雨の時等絶好の僻地所である。

二、天 幕

長期滞在には天幕をカク木に張り北壁の根に抱かれたい。出合附近、両岸上流の左岸中ノ沢に至る向迄適當にキヤマブサイトは見付けられる。出合上部は雪渓は切れ、木藪も豊富でロソ沢上部も左岸から水は流れている。長期に渡つて天幕生活をする時は、霧と雨の王国カク木里に対し充分抵抗のあるのをいうべきでフライの威力も發揮出来よう。此処から見るバツトレスは終日我々を倦かじめない。

三、二候 岩 小 舎

見ていないから分らないが針葉樹八号に詳

細に記録されている。二股出合から二丁程下
 れは右岸の河原から二十米程の岩壁があり、
 その上は帯状のなだらかな草叢でその上縁は
 急な崖や樹林になつてゐる。この草叢のやゝ
 上流寄り岩壁にのり出して突起してゐる丸い
 樹叢の下にある相であるが、此処からカク木
 に行くにはどうしても上縁の急崖を二十米程
 登らなければならず、川に水を取りに下るに
 も岩壁を二十米程下らねばならない。而し五
 六月頃なら全部雪淺続きで二十米の岩壁も雪
 に埋まり僅か二三米上れば若小舎に入れる。

北 壁

北壁は北端を頂点とするほぼ三角形のバツ
 トレスで、雪淺上端から七八百米の高度で八
 九本のかりー北端及びその左のピークから左
 右両側斜下に向い、約二三〇〇米の当りから
 真下又は幾分可手で脈を抱き込む様にカク木
 の中心に向つて折れ曲り、上部に残雪を有す

るものはここで滝となり雪淺の上端に落ち込
 んでゐる。北壁は之等のかりーによつて低い
 リツゲを形成し、二一〇〇—二五〇〇の間に
 帯状にバツトレス全面に殆ど垂直の壁を作つ
 ている。この帯は北壁の特徴をなすもので、
 所々オートバーハンクとなり登攀に際して大き
 な問題になつてゐる。即ち北壁に如何なるル
 ートを取ろうとも殆どが取付附近のこの帯に
 踏まれ過大の時間を取り、之を乗り越えて更に
 上に向う際に時局的余裕を無くし、又登り切
 れば引き返す事は不可能である。バツトレス
 登攀の鍵は総て此のバンドにかかつて居る。
 取付いて下を見ればスラブ様の岩盤と残雪が
 悉く丸め程深いバルグシユルンドを成し、乗
 る岩は信賴が置けず、ハーケンを打てば滑を
 入れた様に岩は欠ぐれて一三四バウンドした
 程は音もなくシユルンドに吸い込まれて行く。
 而しこのバンドを切りぬけると上は傾斜はゆ
 るくなりアツシユかふえて安全性は増大する。

リツケの藪やかりーのかレ場草付をこなし
行けばよい。高麗にしてバンドは壁部の三分
の一位だが所尋時向は半分又はそれ以上多く
かかると思てよい。即ち之等の登攀は岩登り
として決して快適ではない。バットレスは極
めて稀にしか踏まれて居らず、岩壁は不良急
峻である。ルートに取り得るものはすべてブ
ツシエを混じ岩稜と云い得ない。

右 称

カクネ里全般の名称は殆ど仮称に過ぎず、
慣習されたニミの共通のものを除けば各報告
夫々統一したものは無い。我々は此の中適當
と思つもの及び我々の仮称に依つてゐる。例
えは白岳又は本当はシラタケと呼ぶらしいが
白岳シラタケが存在するので故意に之を僻けてゐる。
ルート図に仮称を記載したから以下に述べる
廻々のルートについては図を参照されたい。

北壁をカクネ里から見て特徴的な扇形岩雲

(バットレスの左寄り天狗尾根側中腹に扇形
又は頂尖を下にした三角形)と翼の雪渓(バ
ットレス右寄りに最も深く喰い入る)とによ
り、両者に囲まれた箇所を正面バットレス、扇
形残雪の左を天狗尾根側、翼の雪渓より右を
キレット側と称する。

正面バットレス

ルートは扇形残雪側即ち左からはじめて順
次に移る。

一、ピーフリツダ Peak ridge

扇形残雪の右肩に着明な三角形の岩壁が二
つ並んで見える。天狗尾根のちよつとしたピ
ーク(荒沢の頭)から始まり、二本のP、P、P
リツダとなつてバットレスの中腹に展開した
二つの岩壁は扇形残雪右縁に於て再び接とな
りカブネの雪渓に至つて居る。

P、P、P、P

一九三〇年夏京大令面代が初めてクネ入をされた時登られたルートであるが、天候悪化の爲岩壁下で引き返されて居る。一九三一年秋京大は再び同地裏で引き返し、一九三二年甲南氏は同地裏から左の扇形残雪へトラバースし天狗尾根に出て居られる。一九五一年夏我々も之をトレスし同じく天狗尾根に出たので岩壁より上部は未完成の儘残つて居る。カクネからの取付は扇形残雪より出て居る目立つた塊のあるルンゼの真下から右に取付くかすつと下の末端からである。取付よりわづかに登るとリツゲは岩壁を境界とさえやるブツシユ中の登攀に終始し悪場はない。我々は扇形残雪寄りに岩壁に取付き残雪の上にある沢の流の右を架り越して岩壁の左寄りに岩壁上のリツゲに出ようとレオパーハンクに阻まれ退却したがりツゲをそのまま岩壁の右寄りに上ればさして困難ではなさ相である。岩壁の上は下部と同じく天狗尾根ジャンクシヨ

ン附近を除いて叢の連続だ。天狗尾根に尙軍に出るには残雪上をトラバースし残雪の左側の取付を登ればよい。(南西字運報吉三号、四号及び本報告記録参照)

P₂リツゲ

一九三一年京大はP₁の引返しルートとして之を下つて居る。リツゲは上部で更に右側の螺旋岩壁に回しP₃稜を派生する。この間は極く硬かに草を付けたスラブで少し氷が荒れて居る。P₂の取付はP₁と同じく花崗岩に始まりすぐに草付ブツシユになつて居る。岩壁はP₁よりもリツゲとしての感が深く叢の中を直登し得るのである。之も岩壁から上部の記録は無い。P₃はスラブに深く入つて居る雪溪から取付きスラブの右側リツゲの側面を登り螺旋岩壁を右奥に見るリツゲ上に達しP₂の岸壁を左に見て扇形残雪とP₁、P₂のジャンクシヨンの中間の高さで尾根はP₂に合す。P₃は次に述

へる蝶型岩壁左尾根の下部の登路となるものである（関西学連報告三号参照）

二、蝶型岩壁左尾根

蝶型岩壁とはバットレス中央やや左側淡の上端に一目で夫と分る蝶の羽根の様な赤茶けた岩壁で、上部の残雪のある大きなルンゼ（蝶ルンゼ）は岩壁の中央で遙となり中央部には岩洞が認められる。岩壁の左羽根のオーバーハングに下から見えないかすかな滝が別にある。之はピーフリツゲと蝶型岩壁左尾根の間にある上部は割に傾斜のゆるく見える残雪のあるルンゼ（天井ルンゼ）から落ちていくが、下からはP₂尾根の爲滝の出口は認められずルンゼも中途で消失し、或いはP₂とP₃の間のスラブを流れるわづかな浅いルンゼに続くかの様な感を抱かせる。蝶型岩壁左尾根はP₃に続いてカクネに下つている様に思える程上部のバットレス中最も粗大なりツゲは下部

に於て貧弱にわづかに蝶型岩壁の左羽根の一部を形成するに過ぎない。故にこの尾根に取付くには未端たる蝶型岩壁よりなさんとすることは不可能で上記のP₃のカクネ里側側面から取付き、蝶型岩壁を右側に見るリツゲ上に出、西米足らず尾根通しに行くことバットレスの帯に当るオーバーハングに行き着る。此処でリツゲは蝶型岩壁左羽根の縁となり直登は不可能で更に帯の下部を左えP₂と派生尾根の間の小ルンゼの方へ七〇米程トラバースし、所々大きな樺を突え左岩と算付から登る。此処はこの尾根の悪場で三十米五ピツゲ程でエースを切り脱け、再びP₃リツゲ上に出る。すぐ右下に天井ルンゼが北壁中にこんなゆるやかな所があるのかと意外に思はせる程ゆつくりとピーク尾根側から蝶型岩壁上部にかけて斜に流れている。このルンゼを簡單に乗り越えて眞の蝶型岩壁左尾根が始まるわけであるが難場は最早過ぎ去つて居りあとは大きなリツゲ

をアツシユを潜き或はカレ場を過ぎとんとん登ると天狗尾根とのジマンクシコンに着く。なほこの尾根は一凡三六年一月一日五教に依つて完登されている。(五教報告五号八号本報告記録)

三、蝶型岩壁右尾根

岩壁の右に主稜と並んで下部はカクネの雪渓中に突き出ている。登行目録を主稜にとられ隣の目立たぬリツゲなるが故に未だ登攀記録が無い。下部は岩壁の右羽根の縁をなし上部は蝶ルンゼの残雪上端から大きく右にカーブレ殆んど消えかけた低い稜となり北捨左のピトフに終る。取付きは主稜と並ぶ岬の末端からがよい。蝶型岩壁に何つて余り深く入るとクレバースに行手を閉される。蝶型岩壁の右側同高度の部分か帯に当るリツゲ通しに行つてもアツシユは安全に体を支えて呉れるであらうし、右側主稜との間のかかりの岩壁へ

京大が主稜のルートとして登っている)上部から再びリツゲに出てよい。この岩壁下部は岩硬く中程逆層で脱く傾斜も強い上部は再びサウンドになる。悪場は帯の架り越して稜の上部は左尾根と同じく藪リツゲである。

四、主稜(京大ルート)

一九三一年秋京大の完登以来余多の無人を北壁に誘い込んだ記念すべき此の尾根は北捨のすぐ左のピークから最も長くカクネに張り出している。即ち下端は蝶型岩壁の右に一帯深く岬状に突出する。京大以後夏季稜高、早南等にトレースされ、又一九三六年一月一日早大に依つて横雪期登攀が完成された。ハントレーヌ中困難なルートの中に針之上りられ長さからして所要時間は今迄述べたルートをはるかに抜くものである。以下京大の報告に依り要旨をあげておこう。「右寄りに主稜に取付き浅いかりーを左に見て四十米ばかり

上で左にトラバース左ガリーに入り七十米上に第一のテラスがある。此の上のフェース

を左寄りから取付いて右寄りに進む要にフェースを左寄りに第二のテラス此処から真直に立った尾根の下を左にトラバースガリーを登り切り第三のテラスへ、右へ今の尾根続きのテラスを越して右側のガリーに出る。このガリーの右続きが主稜だ之に取付き岩場を十米過ぎブツシユに入る之を五十米（最も難場）ナイフエツダを通りぬけると再びテラスがある。此処からはリツダ通しに又左のガリー寄りに更には左の小さな尾根からその左のガリーに這松を漕ぐ。あとほ草付、岩、這松を登り切ると頂上すぐ左のジャンクシヨンに出る。なほ此の時ジャンクシヨン直下でピバークをなす。第二登頂高は主稜右のリツダに取付き右のガリーからリツダに出左斜面をトラバース再びリツダに出其の右リツダ上を最右の岩塊を右へトラバースし右リツダからジャンク

クシヨンに出て居る。京大は十一時間（三色）を費やしている。

五 正面尾根（甲南ルート）

主稜の右バンドの部分はテラテラの岩壁で殆んど手がつけられ相にないかわづかにリツダと云えるものか主稜右に深く峻込んだ雪渓上端に認められる。此の岩壁の主稜寄りから右上方に何い全高距の三分の一（下から）の所で切れて壁となりブツシユに続き北極の左下ピークから右下に下る判然としたリツダとく字型に合している。一九三五年夏甲南パーティに依つて登られたと学連報告に記載がある。たりで甲南報告を見て居ないのではつきり尾根の性質が掴めない。而しバツトレス核心に深くある中央壁及び壁かの隆起として認められるリツダはブツシユをもつけず険悪さ登攀の困難さは想像に余りある。

（学連報告七号）

六、中央ルンゼ（関学ルート）

中央壁の殆ど右に寄つた部分に深くえぐれて常時懸垂を形成してゐる中央ルンゼはニミ〇〇米最後のオーバーハングを棄切り上は頂上迄小さな沢リツゲのブツシユ帯で北槍頂上に繞いてゐるカク不里下部より見て北槍ピークの真下中央壁に一際深く喰い入る陰影として容易に認め得る。ルンゼの高さは全高壁の半分に及び右側にはつきりした後がルンゼの上迄有る。一九三四年夏関学塩塚氏等により登行を開始されて以来、一九三六年夏同じく関学によつて初登攀かなさしれ一九四〇年夏一九四八年夏と全部関学の手によつて第三三登されてゐる。ルンゼは七つの塊を有しルンゼ右側の草州から取付く途はすべて右側（左岸）を捲いて通過するか就中第三塊上のトラバーサ第五塊右の筆直の算付き第四第六塊の完全なオーバーハング登行中の絶えざる巻石、退却の殆ど不可能の登攀は登攀者の最大の努力

(三〇)

と慎重を要するであろう。ルンゼ五塊（右岸）岩壁は登行不可能でルンゼの中心通し及び左岸の壁をルートとしなければならぬ。（関学速時報ニ〇、山小屋一五三）

七、直掛尾根

中央ルンゼ右のはつきりした後の右の岸壁の更に右の北槍ピークよりカイレクトに斜下下つてゐるのが之である。即ち下部は異の雪渓の入口より少し入つた所に終り、カク不から見た時此の尾根と更に右の右リツゲ（次塊）とか北槍頂上に致もダイレクトに繞いてゐるので我々は之を直接尾根と呼んでゐる。上部は殆どブツシユにおおわれているが正面ハットレスの左側の各尾根に比し上部も急傾斜で下部は中央壁と同程度に殆んど筆直に切り立つてゐる。おうるに取付に至る異の雪渓は七月以降に於てはずたぐに割れ覗けば深淵は挑戦者を呑むが如くその腹底なる杯相は

名立たる飯徳高の踏雪溪に比すべくもない。脱岩の取付に至る迄クレバースに掴まされ取付地奥が帯の一部をなし、一端雪より岩に移ればベルクシユルンドの窓知れぬ深さに思はずセルフビレイのハーケンを打たずに居れず、其処からは登る者も取付を確保とする者も常にシユルンドに引きすり込まれ相な感を抱かせる。正面ハットレス中支稜と同じ位目立つ稜でありながら未だ登攀記録を聞かぬのも大体以上の様な理由によるものであろう。尾根は主稜程長くなく取付の岩壁の登行如何にかかっている。一九五一年夏我々は二回之を試登し共に失敗に終つた。一回目はリツゲの末端に取付き雪溪とほぼ平行に右上に登り右から迂回気味にフェースを直接リツゲに目掛けて直登し何とかツンシユ帯に入るうとしたが、喜退され下降は更に困難を増し取付から四ピツク程(三十米=名)の往復に六時間以上を費やしてしまつた。第一登より見て此のフェ

ース上部の登攀は不可能となり更に雪溪に沿ひ岩壁下部を石上に登ると直接尾根の右に右リツゲとの向にわづかにコンカーブしたフェース様のルンゼ(我々は赤茶けたルンゼと云う)があり此のルンゼの岩壁の二十米程上部に僅かなテラスがある。此のテラスの上でルンゼはオーバーハンクをなすが之を併け右リツゲ側のフェースを登り再びオーバーハンク上に出て直接尾根に取付くかテラスの左フェースを直接尾根に出んと第二登を試みたのであるが赤茶けたルンゼのテラスに達しようとするに右リツゲ側のオーバーハンクと脱岩に行手を阻まれ敗退した。而し未だ試みないルンゼとしてルンゼのテラスに遷する二十米程のフェースにルンゼの中心に僅かなリスカテラスにのびて居りルンゼの核心位に直登すれば恐らく達し得ると思ふものがあるもビレイ地奥に久く幸及びすが下に口を閉くべしルクシユルンドを考慮に入れなければならぬ

い。ハークンは正面バツトレス中この尾根に於て最も多敷を必要とする。

ハ 右リツヂ

奥の雪渓に入れば直接尾根、赤茶ケタルンゼの右岸りに雪渓に凸角的に出ている此の尾根の上部は北楢ピークにダイレクトに至るもバツトレス中右に傾している為位置的に認められる雪の少い尾根である。上部は七に比べ傾斜はゆるくバツトレス右に大きく張り出し尾根の中程にはつきりとブツシユの暗緑色中に白く欠けた部分を認める。此穴でリツヂは一連テラス状になつてゐる。取付は赤茶けたルンゼのすぐ右の突角部から尾根の中腹の白い斑裏に達し、その後ハブツシユ中を北楢ピークに至るがこの尾根は六月末迄に登られるべきものでそれ以後では取付にさえも達し得ない。尾根の下部の取付の右側はフエイスを形成し雪渓に落ち込む困難な岩壁である。

(三〇)

九 右ルンゼ（浪高ルト）

右リツヂの右のルンゼで北壁中最も右に位置する一九三五年三月浪高今西、中村両氏により積雪期に於ける北壁初登攀が此のルトに依つてなされた事は特記に値する。北楢ピーク直下から奥の雪渓に入る最もルンゼで之の右支稜はすべて固境尾根から出ている。夏季ルンゼは無氷なるも赤茶けたルンゼと共に降雨があれば完全に氷にならう。浅いルンゼの落口は短いが殆んどオーバーハングに近い楢に憑はれフエイスの登攀は夏期に於ても敬慮したい程のしので積雪期は之が埋つているとしても重直に近いホルルトの悪い処と皆無と迄思はせるルンゼの中半が更にその上に続き登山の可能性を益々少くしている。初登攀以後夏季に於ては未だトレースされて居らず之をルトとしてあげざる事も幾分躊躇される。(幸運報告六号、浪高報告三号)

十、英の雪溪

七、八に大体書いたが然括約に云うと左側へ右岸はすべて北麓に続く岩壁、正面は国境東側の懸崖で特に国境尾根を及びは夫と分るキレット北麓の中間の赤褐色の岩塔の左に雪溪は面り一つの稜上のアンカレットに出る此の岩塔の右側は国境尾根から覗くと筆直に雪溪を見下せる岩壁で之の登攀は絶対に不可能である。ルートは岩塔の左に入る雪溪からリツゲに出るがこのリツゲの下部は筆直なるもしつかりしたブツシユで懸崖の連続である雪溪の右側(左岸)は洞窟尾根第一峰ニ岩峯の側壁をなすか突ニ岩峯直下の草付及び峰ニ岩峯上部のリツゲの側面から洞窟尾根に出、国境線に達する事も可能である。英の雪溪は下から氣孔は北壁の右上に上る最も深いルンゼとして認め得るかカク万里からの入口は洞窟尾根の下部最左端に陥られて見えな。七月以降はルートにならず登陸とする以外に錯

雜した上部の景観及びフレバースは一見に屈するものである。一九三五年六月初旬小谷部氏の単独行の記録を見よう。『獨りが物すごい岩壁だらけなのとこの雪溪自体非常に急で狭いので何だか上から圧え付けられる様な息苦しさを感じる。国境東面の二十米余の壁にぶつかり雪溪は左に落ちる雪溪が無くなつてこのルンゼ上部の十米程の草を交えたアンサウンドの岩場を築り越すと北麓寄りの国境から一直線に英の雪溪へ落ちる険しい段の途中一つのアンカレットに出る。此処から三十米筆直で所々にある小さな板により扉二のアンカレットが、其処からはしつかりした岳壁がありやがて傾斜も五十度弱となり密生した森を潜いで国境へ出る。(針葉樹八号)

キレット側

一、洞窟尾根

英の雪溪の右に在り今迄の様な様でなく立

派な尾根である。下部はカク不呈雪渓中に最も長く突出している此の岬の部分の左上端からルートは始まる。取付の岩壁に、ニ、三の洞窟があり下からも黒い斑点として見える。取付の岩からリツギに出る四ピツギ程が面白い。リツギに出ればあとは乗で下から第一、第二岩峰有り第一は直登ししくは左へ第二は基部を右に捲いて再びリツギに出るか其の儘草村のフエースをジャンクシヨンに伺えばよい。(一) 針葉樹八号 関西李運報七号 本報告誌録

二、キレット尾根

洞窟尾根第一峰ニ岩峰右横の極く小さいルンゼは尾根末端の岬の右の雪渓に入っている。その右寄りにはフツシエを交えて洞窟尾根のザイテンクラーフトをなしている。グラートの右に急傾斜の細い雪渓があり雪渓の右にドームの如くそびえているのか此の尾根である。カイネから見た時ドームから二本のリツギが左

右に足を張りこの間の下部は僅かに雪をつけたルンゼとして認められるし上部は感圧的な岩塔の壁面で特に左上部の赤い岩は今にもカク木の根心に居る残々におそひかからんとしている様に見える。而しこの尾根は岩塔から洞窟尾根に至る間で険度馬の背の様にすつかり傾斜を無くし横腹に上記の雪渓の上部の大きな残雪をべつたりとつけている。洞窟尾根からのんびりした鞍部を見キレット小屋からすぐ目の前に馬の背を眺めた時一度あの上へと如何にも登行欲をそそらずには居れない。而し洞窟尾根のキレット左のジャンクシヨンに達する所は馬かたてがみを振り上げた如く筆直に近い細い稜となつている。岩塔から左足に張つた稜は足にたとえようか、右足はキレット沢下部の左側壁をなし途中一つのピークを越えりとカンテの如く岩塔にのびている下部のピークの部は藪が密生し途中はまばらな灌木をつけて登行の可能性を示している。

我々の登ったのは左足であり洞窟尾根との境をなす雪溪に入り百米も登ると沢は二分する。右に入りカラ場草付から左足リツギ上に出、下から見て岩壁左上部の赤いくづれかかった岩のすぐ上のリツギ上に産し壁直に近い岩稜をフツシユに助けられて岩塔の頂に出た。このリツギの左寄りに雪溪の分岐点からの側稜が略平行に上つてゐる。

岩塔から真正面に見えるギレットはくつきりと青空を覗かせ壮大さは予想外だ。ギレット小屋の鞍部も目の前でギレットから飛する雪溪と鞍部から出る犬か馬の背の右で合しギレット沢に通じている。この沢は立紋が積雪期に下降路として用いられた事のある道はないが始終落石に見舞はれる雪溪だ。(本報告記録)

三 キレット沢左尾根

ギレット沢は中程で三分し、(1)は左に、(2)中は下降ルート (3) 右はギレット沢右尾根

側面のカラ場に終るギレット沢左尾根は(1)(2)間の短い雪層のたか傾斜の急でない稜で一丸四三昇夏浪高如藤(現坂大)等に依り記録されてゐる。ギレット側一帯にそうであるが特に落石は甚だしい。

四 キレット沢

先に書いた(1)は最も深く切れ込み兩岸(ギレット尾根及びギレット沢左尾根)は倒れかからんばかりの岩壁で落石烈しくクレバース多いがギレット尾根岩塔に向うフェースは岩も堅そうでもホルドも好く岩登りによかるう。(3)は特に云う事もない。(2)(3)の間(2)寄りの所から岩登りに極く適した短い岩稜が伸びギレット沢右尾根ジャンクシヨンのすぐ左に一丈した岩等を固境尾根に突立たせてゐるがこの岩等はサウインドで多程のフェースを有し岩登り練習に快適の様である。(2)については下降路の項及び本文記録を参照されたい。

五、キレット沢右尾根

キレット沢(3)を左側面に喰込ませているこの尾根は国境線五重麓岳間の最も高いピークに続くので相当長い下部カクネに傾いた部分ばかりで相当の岩壁である(3)の下はごく平凡な斜面で之からリツゲ上のブツシユ帯に出ればよいジヤンクシヨン近くは相当急なフエイスで最後の箇所が少し悪い。一九四三年夏浪高徳永、家田(現大取)及び今夏の二回の記録がある。(本報告記録)

六、口ノ沢尾根

中ノ沢を隔てた五重側の尾根は上部の中ノ沢側は大分かかしてある。数尾根だ口の沢はカクネ里の雪渓中側方にのびている最も大きなもので中風送おとなしいが上部は一直線に国境尾根に上り上部は赤い土砂のカレをなしている。口の沢の右にある口の沢尾根も長い下部は数上部はカレ場で一九三五年夏浪高佐谷氏

(三四)

等の登攀記録があるのど之を勘しておく。「雪美(口ノ沢)半途で右尾根に取付き途中蓋松の成つた壁で中断され右へトラバース残イルンゼに入り草付より再び尾根に於草付蓋松を潜ぎ国境へ」高距が大で相当時間を喰ひ相た。(関西学連報告七号)

天狗尾根側

カクネから急にセリ上つてゐる小さいヤブのリツゲと短い雪美の幾つかの連続である。中ノ沢に恰度相對して天狗尾根側では最も長く雪美の続いている沢がある。上部のかレ場からの落石が畳々と積み重なり雪美はくの字形にかレ場から右に折れ天狗の鼻に何うか接線へ出る百米程は笹と灌木の叢生で殆んど登攀の対称とならず。接線に出れば大川沢に入る曲リ沢をはるか下方に認め得るだけで尾根の贯通しは全然効かない。次は天狗尾根最底終部へ天狗の鼻から二鉄目のコルに上る

もので扇形残雪下のルンゼ左のリツゲの藪槽
きにより之に違す詳細は本報告記録の部を参
照されたい。稜三に前記したピーク尾根P、か
ら扇形残雪をトラバースし扇形残雪左の草付
を十分に登ると容易に天狗尾根に達す。時同
的に天狗尾根に達する最も早いルートである。
すべて天狗尾根側は回境キレット側と異り藪
密生し岩質は堅硬である。

天狗尾根

一九三三年五月同志社兒島氏が東尾根荒沢
の頭から天狗尾根を下りピバークとしてカイネ
に至られたのが最初の記録であり、一九三七
年三月源高松林氏が遭難された尾根である。
天狗の鼻より下つた最底鞍部から藪をつけた
鞘を三つ位越した上に四角の特異な岩が目立
つく。之はその形から小倉岩と称せられ扇形
残雪左端総んど真上にカクネからも見える。
荒沢北候北候のジヤンプションに当る小倉岩

の上に二つの岩峯が相接し下から稜一葉二岩
峯と云はれる。扇形残雪の真上に認められ、
天狗尾根から見ると二つのドームにより形成
されてゐる様だ。最底鞍部から岩峯の当り左
は藪が密生し総んどカクネ側に之を潜いで行
く。荒沢側はすくと落ち荒沢の雪溪が落石
で殆んど褐色に変色し、北候南稜北稜は北崖
ハットレスを遙かに凌駕する險悪さで荒沢奥
壁をかざり之等にアタックを敢行した源高今
西、小林氏等更には想像だに絶する積雪期完
登の東大佐岩(源高の右)東京商大小谷部
氏等の努力に対して感慨は盡きぬものがある。
東尾根第一葉二岩峯を荒沢を隔てて左に見、
ルートはカクネ側の斜に傾斜のゆるい藪中を
過ぎ、小倉岩はどちらを捲いてもよい。第一
葉二岩峯は真正面から取付き大峰荒沢御即ち
左上に向つてフェースを登る、此処から上は
荒沢側もゆるく遠松程度で藪も少くカラ場が
ふえて来る。

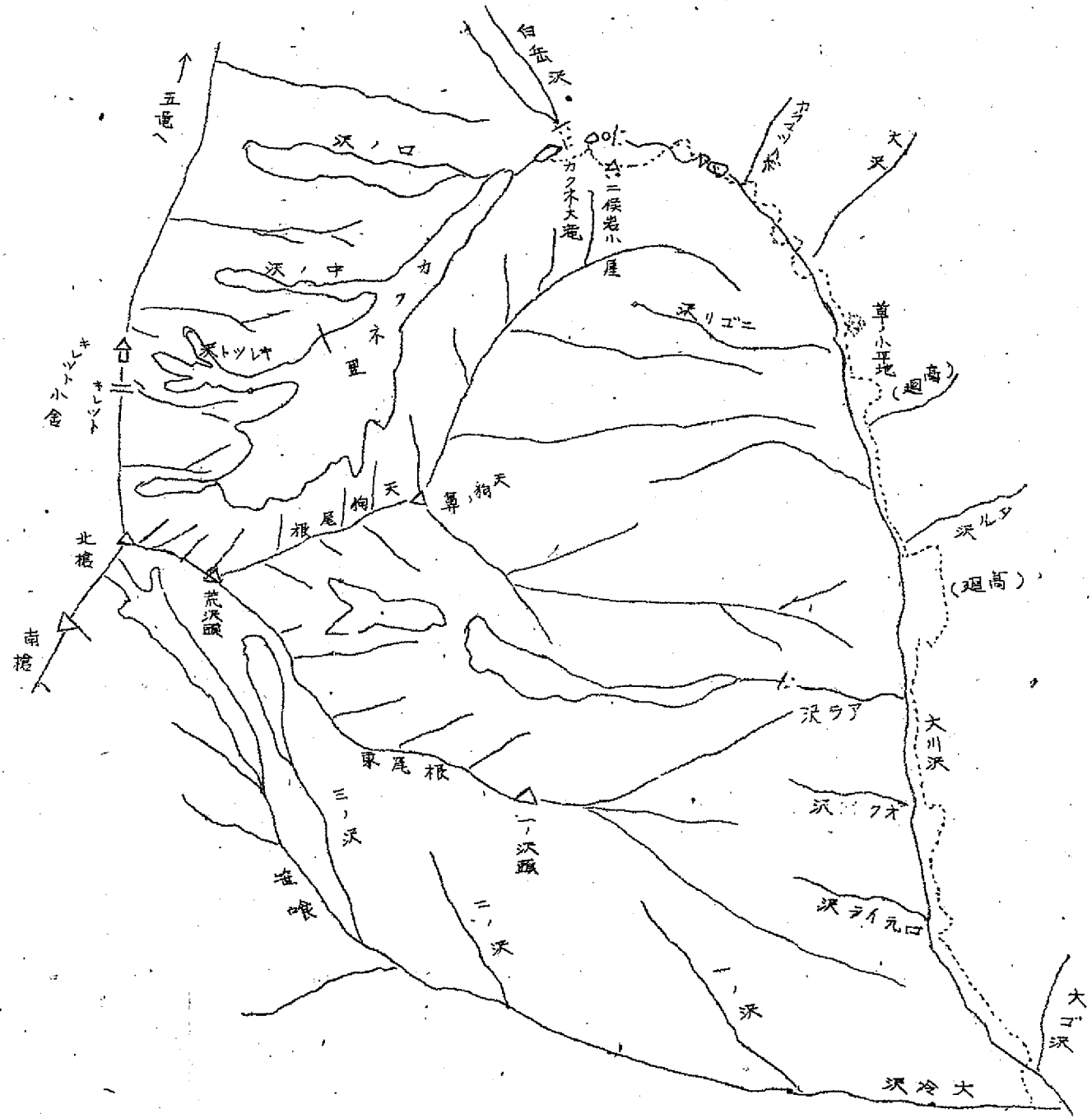
荒沢の頭（天狗尾根、東尾根のジヤンクン）に至れば僅かに踏跡もあり、尾根筋のピークを三つも越せば北極の頂上である（針葉樹八号、本報告記録参照）

文 献

- 「山岳三六年二号」 「山五号通判一四一」
- 「山小舎一五三」 「ゲルン一三」
- 「関西学生山岳連盟報告三四六」号及び時報二〇^{No.3} 「針葉樹八号（東京函大報告）」
- 「立教報告五七、八号」 「滋高報告三三号」
- 「リニックサツク（早稻田報告）九号」
- 「大阪薬専報告一、二号」

鹿島槍岳東面概念図

家田千尋



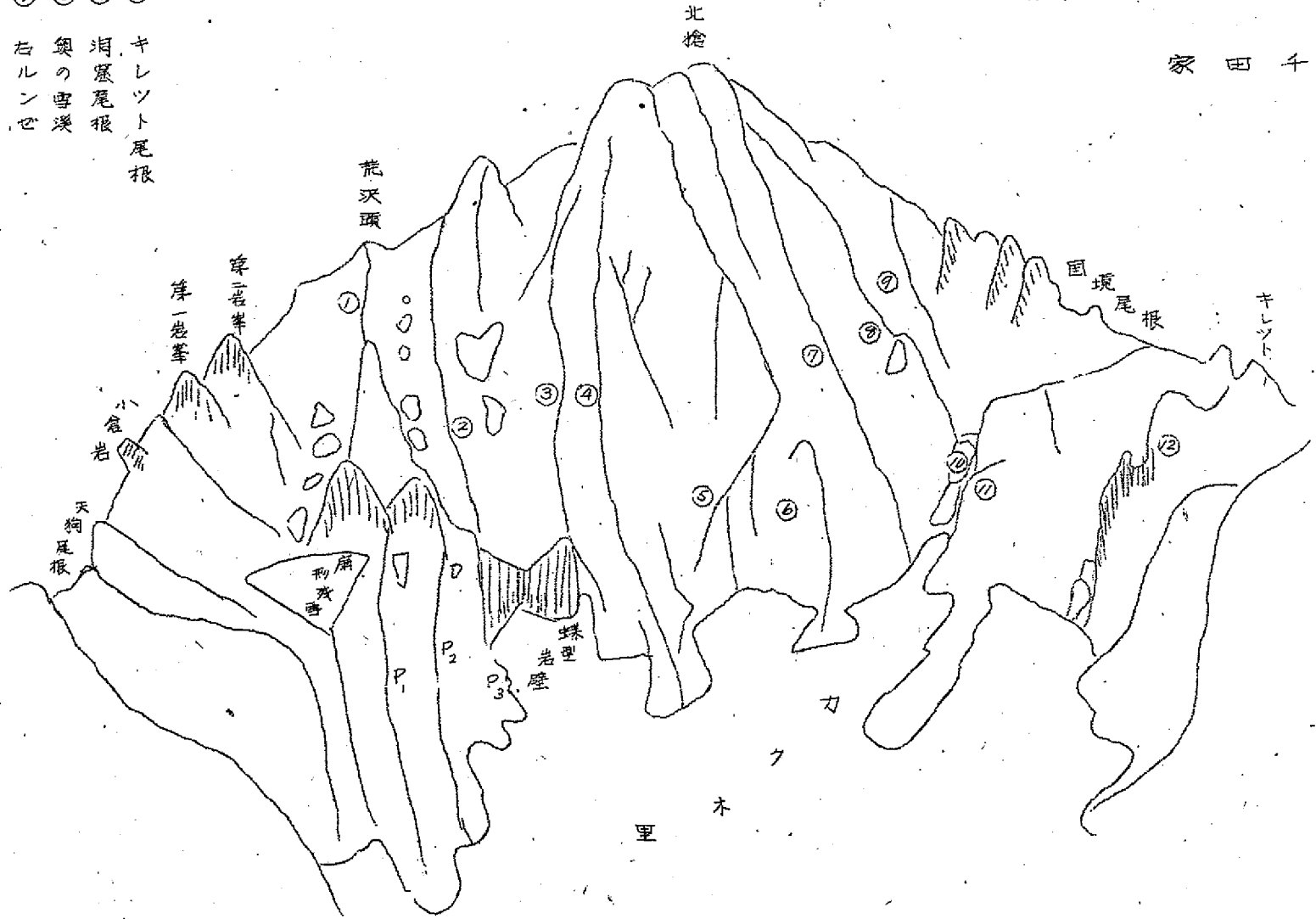
(F. III)

カクネ里より見たる

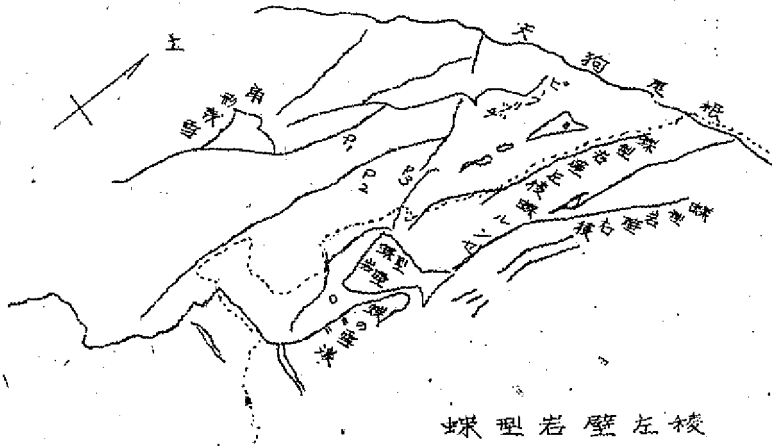
鹿島槍岳北壁

家田千尋

- ① キレット尾根
- ② 洞窟尾根
- ③ 奥の雪溪
- ④ 右ルンゼ
- ⑤ 右リッヂ
- ⑥ 直梅尾根
- ⑦ 中央ルンゼ
- ⑧ 正面尾根
- ⑨ 主 嶽
- ⑩ 蝶型岩壁
- ⑪ 左尾根
- ⑫ 右尾根



登攀記録



螺型岩壁左稜

○ 螺型岩壁左稜

七月二十八日(快晴)バライ家田林久保丈村
 B.C(六三五)——洞窟尾根の岬左下端(七
 四〇)——雪渓を左にトラバース——螺の雪渓の
 一つ下の侯(P₂ P₃間の雪渓侯)に入る。正
 面は大きく口を開いた縁割れと岩の壁壁で取
 附き得ず。左端雪と岩の接したる所を見つり
 て渡り、左へトラバースしてリツゲP₂上に出
 抜中を少し登つてから小さなバンドを伝つて
 右へ下りP₂ P₃間のスラブに出る。アンサイ
 レン。落石の乗つた緩傾斜スラブのトラバ
 ス。終つてP₃側面の藪岩場を登りP₃上螺の頂
 稜の左下。P₃稜かやや平になつた部分に出る
 稜上前進。すぐ螺の岩壁を含んで横にひろか
 る急傾斜に行きあたる。若し螺の雪渓にクレ
 バスが無ければ雪渓をつめて左へトリニコに
 達する事が出来ると思ふ
 急な壁の裾に沾つて藪中を左へトラバース。
 小ルンゼ(ひとく四凸だが完全な岩薄)を一

本見送り次の岩場から上へ向う。傾斜は急だが氣味の悪い皿状のホルルドがあり登りきると草村・これと急だが教まじりたからとうにか登れる。再びP₃上に出るとすぐ向う側に天井ルンゼの豊かな水が流れて居る。蝶の窪い岩が侵蝕を妨げた為にこの様な緩傾斜の窪い

下の深い岩場を直登して天狗尾根上(一、五)後はぶらぶらと北端トキレットーB、C(五〇〇)

(久保記)

① 直持尾根

七月二三日

二本、細見

ルンゼで残つたものである。天井ルンゼ又はルンゼなる名採も本高で西側は切落ちて居る。この横断面を想像してつけた名である。ルンゼ水辺へ簡單に下り昼食(一〇、三〇―二〇〇)左横側面に取附いてコンテナニアスに竅の中心を登り少し左へ捲き氣味に取つて左手のルンゼ(ルンゼ右侯の一つ)に入り登りつめて完全に左横上に出、ザイルを解く(ヘーニ、〇〇)ここより左手ルンゼをへたてたりツギは甚だ顯著な岩峰を有して居るのでピータリツギなる名をつける。意松と岩との稜上の登行、左横が上部で天狗尾根側面に消え込むあたり

合宿前に調べた文献に於けるリツギの名称の混乱。即ち針葉樹8号は此の直持尾根をG₄主稜と名づけて居るのに対し、浪蕨報告に於ては針葉樹G₂にあたる尾根を主稜(現在我々はこれに従つて居る)として登攀文をかかして居る為、この両者を混同した私達は合宿の手始として過去に登られた主稜をトレースして居るつもりで與は未登の直持尾根へ取付いて居たのである。B、C、六三〇、茶一洞窟尾根末端七五〇―これより雪渓の敷多いクレバスの攀越に非常な苦勞をなし、一七、三〇、赤褐けたリンネ左下のフェイス直下、二本トツプフェイス右端のクラックに取り附いたが扱め

の風化した岩場はちよつと厄介、天狗尾根直

懸高で一日晴れの時でも半日しか晴れず従つてラツシユに適した日は合宿中一回しかなく多くの部員が下でラツセル終始するといふのが普通であつた。それで今度の冬山は皆か何回も登れる様に比較的天気の良い南アルプスで行う事に決つた。南の中でも四九年十一月新雪に全くおわれた東北尾根下部側面にルートを開拓していた北岳バツトレスを目標とする事となり、九月に四名が先づ入つた。此の時に従来登歩誤流会松清氏等によつて第一尾根側から登られたのが唯一つの記録とされていた第二尾根に対し、反対側からの新ルートを開拓したのを始め、第五尾根、築工支稜、東北尾根等を登つた。

次に十一月には前上りに広河原小屋に三名で入り、第一尾根支稜を登つた。所が此の頃から有力な隊員中に家庭の不幸や、卒業試験の都合で冬山に参如不能の者が出て冬山は参如者五名、しかもその中二名は中途下山の必

要があるといふことになつた。又南へ行く機会にバツトレスよりも大きな冬の稜線歩き我々に不足していた三千米における冬季の高山露営の経験をつむ必要があるといふ以前からの考えが再燃し、部長先生もその考えを支持されたので、バツトレスを中止し、北岳頂上にテントを建設し養馬を目標とすることになつた。予定通り五名で赤ウギ沢より広河原小屋に入り、大群に第一キマツア、北岳頂上に二人用のテントをはり、二人泊り三名は広河原へ下つた。頂上の二名は天幕の破損等の悪条件のため、中の岳迄行つて広河原小屋に下つた。一方先に下つた三名の中二名は予定通り広河原より下山し、一名は単独で広河原より尾根に縦走してグイハークし、広河原小屋へ下り頂上よりの二名と合体し下山した。以上が我々の秋冬の北岳の行動の概要である。北岳バツトレス、第二尾根及び冬山の詳しい報告は紙面の都合上春山と共に次号

(六月発行予定)にゆづることとした。尚以上の外十月と十二月に英穂高に各一パーティを送った。

尚冬山は北岳隊の外に一隊は八方尾根にテントを張り、恵松往復及びスキー練習を行つた。

(大 島 記)

我等の歩み

回顧と展望

私達が阪大山銜会を結成してから三年、時報も三号を出す事になったが、誌面の都合上各合宿の経過等も單に記録欄に書くに止めたのでここに各合宿の意図目的等を我々の発会以来の経過と共にまとめて書く事にした。戦前阪大の医、工、理三学部には別々に山岳部

又は山岳スキー部が存在していた。之は大阪帝大が出来る前の大阪医大、大阪工大の山岳部が大阪帝大になつてからも校友会が遠く離れていた關係で、その僅合員しなかつたからであらう。先輩には前面学連の育て親の一人である水野祥太郎氏や初期の冬の北嶺の開拓者の遠藤常忠氏或いは盛岡英次郎氏等も居られるか、何分学生総数も少く学業も忙しい理科系のみで然し各学部に分れて山岳部があるのだから、二三の個人物と云言えるものを除き大してまとまつた記録も生れなかつたのは当然であらう。高松山岳部で活躍された方は阪大入学後もしむしろ高松OBとして母校山岳部と行を共にする事の方が多かつたらしい。戦後学制改革案が発表となり、新制になると教養学部として各学部志望者がまとまつて授業をうける事となり、旧制高松(浪高、大高)も阪大に吸収されることになつたので、どうしても三学部の山岳部を合同する必要を痛感

し、いくつかの前駆的な合同山行の後、統合した阪大山岳会として祭会式をあげたのは四九年の六月であつた。直ぐの夏山は剣で少人数で岩登りを中心とした合宿を行つた。九月には学生改革で遅れて来た新入生の入学があり教人の新入部員を迎えた。十一月の秋山は少人数の三隊に分れる方針で、北岳バツトレス。木曾駒、御岳に行つたが此の時は冬山に

近い皿の積雪に恵まれた。冬山はラツシユを主眼として猿倉の下の北岳を根拠とし白馬差

後の冬期初登攀を行つた。(中系山岳会と偶然に行を共にした)スキーの初心者は細野で練習し後半は北岳隊と合同した。続く春山は新人の訓練と国境の縦線之長く歩く目的で遠

見より鹿島槍往復の計画を立てたのであるが新制は入学のおくれた関係上四月になつてから漸く期末試験があることになり第一次春山は旧制部員のみとなり、結局少し計画を長くして八方尾根より鹿島槍岳の往復に成功した。

往復ではあるが鹿松小屋を利用し、最後は五竜頂上の雲湖から鹿島槍往復したりしたので搦地法ではなく、むしろ根拠を逐次進めたラツシユ形式と言へるのである。

続く四月末には試験の終つた新制部員に家田をリーダーとして加之槍より燕へ縦走した。雨天の中を大天井附近で夜を明かすといつた苦勞もあつたが、皆良く頑張つてくれた。以上の詳細は一考二考に報告してある。

五十年夏夏山は前半を差登り、後半を縦走に分り前半一隊は新人の訓練を主眼に白萩と黒部から剣で合宿し、他の一隊は冬春の偵察を兼ねて南岳にテントを張つた。その佐剣隊は立山より針之木谷南沢出合に至り南沢隊は後半の食糧を補給して針之木峠より南沢で剣

隊と合同し後半に入り三隊に分れ、A、東谷槍、穂高、B、針之木、鳥帽子、雲の平、有峯、C、後立山縦走を行つた。環か五つ、尾か三つという厄介な計画も連絡かうまく行つ

た。大田敬氏も善かれてゐるが大勢の岩登り合宿後少人数で縦走すると、山の楽しさかしみじみと味えるであるう、特に人に殆んど会はずはぬ谷をコースとすると特にその感が深い。

九月になり来春は後立山全縦走に全力をかけることに決定した。我々の戦後五年の後立山研究のしめくりをつけ度いという意味もあつたのである。冬山は前述の経過より二年部員も冬のテントの経験を持たずに終つたので、杓子の双子岩に猿倉を経由してテントを張り雪洞との比叢等を行い更に双子尾根を全頁で往復する計画をたてた。春に備える為の経済的理由より合宿期間も短く予定し、又テントへの食糧運搬計画の不備が豪雪の際にはつきりと示されて二十九日の快晴にも杓子頂上を目前に見ながら、引き返す次第となつた。我々の計画が今迄順調に行つていたので此の計画を軽減し精神的にもゆるみかあつたのである。とばかり、今迄ラツシエを行つて

来た我々に食糧の輸送、配分の計画等にも細心の注意をはらうべきことを教えたのである。春山は予定通り後立山の全縦走を行つた。となつた。積雪期の後立山縦走は立教が手をつけたが、針之本迄の全縦走は岡字によりなされた記録が一つあるのみである。又逆縦走は今迄行はれていなかつた。立教、岡字は秋にけ分所上げをして行つてゐるか我々は秋の荷上げは全く行はずサポート隊を活用する方針であつた。縦走隊の行動が天候に左右されるだけにサポート隊の計画も中々やこしいものである。そしてサポート態勢は全く整つて縦走隊の来るのを待つていたのであるが縦走隊と鹿島槍逆行を共にする予定の坪井君のシリツプにより全計画の中止の止むなきに至つたのは全く残念であつた。シリツプ直后現場附近に雪洞を掘り手当をして負傷者と無事下山させることが出来、又鹿島槍にあつたサポート隊にも直ちに連絡をつけ得たのはせ

めてもの慰めである。結局一年部員の坪井君には少し荷が重すぎた様であるし、又冬山にも此の計画の傾軋に全力をつくし大沢小屋に一隊を送つて生活條件を良くし、おく等の注意が必要だった。

五年の夏山合宿はカク不里で行つた。カク不は昔早大の夏の合宿地として知らひ失敗している如く新人のトレイニングに何いた所に乏しいし、岩も狭道とは言ひ、暗い上に色々な事情でサフリーター級が参加出来ず、一年二年部員が大半で家田、久保等の苦勞も多かつたと思う。たか北嶺直登の新ルートの開拓にはアタック二回の未失敗したけれども、色々なルートに登り、全く無人の境地で朝夕北壁を眺め、底知れぬアレバスを毎日幾つと穂、西、剣で見られぬスケールの大きさをつくづくと味つた。

夏山も終ると冬山は北岳と決定した。此の後の経過は本文にもあるので略すが九月、十一

月の二回北岳パットレスに、又十月、十二月には徳面行があつた。その中九月には北岳パットレス等二尾根の新ルートに成功した。

冬山は予定通り北岳と二年部員以下の八方尾根生活歴松とに始めて分離し、北岳は家田の不幸や卒業実験の關係で緊急式以承の主勤メンバーは一人も参加出来ず、五人でしかもし二人は途中下山の必要があるという少人数であつたがとにかく相当頑張つてくれた。

五年春山は我々としては始めて極地法を行つて予定で約子双子尾根より不帰懸松狂根を猿倉を以て第三キャンブ返つて予定で準備中である。昨春の後立山縦走は不成功であつたが、昨年度に得た色々な体験を新しい世代の人達が活かして今後その成果が実る事を確信している。何しろ一年の学校よりの部費が数千円という経済的貧弱さで装備の補充も苦しいが段々新しいOBも増えるから将来は何とか出来ると思ひ希望を持つてゐる。(大野記)

山行記録

一九五〇六月 一九五一年

一九五〇

六月二十七日 惣合谷右候、二木、坪井
 七月七日—十四日 白馬—飯立山

多喜野、茨崎

七日 大坂発

八日 細野—白馬尻

九日 白馬岳登頂、清水岳を経て榎谷谷

へ向う途中大雨に会い清水小屋泊

十日 榎母谷でキヤンプ

十一日 仙人谷を経て池ノ平小屋泊

十二日 奥砂沢出合を経て飯沢小屋泊

十三日 飯岳登頂、長次郎雪渓を下る

二の日は地獄谷泊

十四日 立山登山、栗原野より下山

七月九日 惣合谷右候、細見、坪井、川島
 七月十一日 夏山トレッキングキヤンプ

於道場、藤田先生、加藤、大島

松久、細見、道、山本、川島、久保

徳永

七月十六日 芦原川本流鹿谷—石ノ室敷—オ

リエントアルホテル—西山谷

久保、二木、坪井

○夏山 七月十九日—八月六日

前半は飯及南沢で合宿し、後半、雲ノ平

取沢、後立山の三バーテイに分れて行動

した。

前 半

(1) 南沢合宿

家田(1)、大島、松久、細見、尾藤

山本、坪井、田比来

七月十九日 栗原野(一七五〇)

七月廿日(晴)(一八一五) 四谷着、細野

(一三三〇) 南沢取入口(一六三〇) 北沢着

(七日)

七月廿一日(晴)第一回アタック

A隊 大崎、坪井、山本

BC (七、五〇) | 三日平 (一〇、二〇) | 鍾南

山陵下部にてガスの、ガルトを誤り引返
し (一四、〇〇) | 鍾温泉 (一七、三〇) | BC

B隊 家田、細見、尾藤

BC (七、四〇) | 不帰沢 (二、三五) | キレ

ツトレ鍾温泉でA隊と会い共にBCへ帰る。

C隊 松久、由比沢

BC (七、四〇) | 唐松沢 (二、三五) | dlル

ンゼ (一四、三〇) | 急斜面で且雪の状態が

悪、為、アンサイレンし、スラップを切

りつつ登る。唐松小屋 (一六、〇〇) | 八方

尾根、八方押出を下ろうとしてルートを

誤り逆の運統した沢の途中で日没の爲、

ビバーク

七月廿二日(晴) C隊帰杖

七月廿三日(晴) 第二回アタック

(六、四五) 全員BC発、南滝を巻く際に

B(八)

尾根の中腹にある四米程の一杖岩の下迄

来た時 (九、二五) 急斜面をものすこい勢

で駆け上った石がバウンドし、あつと云

う間に尾藤に当たった。耳鼓の殺傷で予

定のは不幸中の幸であつたかこの爲、予

定の計画を変更せざるを得なくなつた。

即、松久、細見、家田が真傷者について

引返し他の者は不帰沢をつめることにな

つた。

(一〇、〇〇) 松久 | 不帰沢 (二〇、五〇) | キレット

(一五、〇〇) | 唐松小屋 (一九、〇〇) | 唐松小屋

(二二、五〇) 岩

七月廿四日(晴) BC帰杖、尾藤は予当を終

へ帰阪

七月廿五日(快晴) 第三回アタック

山本、由比沢 BC (八、四五) | 三日平 (二〇、

二五) | 杓子沢 | 国境線 (一六、二五) |

白馬岳 (一八、〇〇) | 大雪山 | 猿倉 (三二、五〇)

| BC (一、三〇) | 家田、大崎、松久、坪井

細見、後半計画参加の爲細野へ下る。

七月廿六日、夜半降りし爲終日休養

七月廿七日、BC撤収下山

(2) 釧合宿並江山縦走

A隊 加藤(CI)久保、小林、白萩川經由

B隊 川島(T)ニ木、進林北條兄弟、黒部經田

七月十九日、大阪発(一九五〇)

七月廿日(晴)

A隊、富山(七、六)―上市(九〇〇)―バン

バ島水電取入口水屋(一七、三〇)泊

B隊 三日市(八四〇)―宇奈月(一〇、三〇)

―阿曾原(一五、〇〇)

七月廿一日(晴)

A隊、バンバ島(七、二〇)―白萩川―小窓

(一九、一五)―二股(二一、〇〇)

B隊 阿曾原(七、〇〇)―仙人谷―池ノ平

小屋(一六、三〇)―二股(一八、〇〇)

七月廿二日(晴)真砂沢出合にBC設営

七月廿三日(晴)源治郎尾根

BC(八、〇〇)―源治郎取付(九、二〇)―一峰(二二、一五)―二峰(二二、五)―釧佐

(一四、〇五)―平藏谷(一五、三〇)―BC(一六、四五)

七月廿四日(晴)八峰上半

BC(八、四五)―五六のキレット(二一、〇〇)

―六峰(二二、四五)―八峰(一四、一〇)―二

トドル(一五、三〇)―長次郎雲漢(一六、三五)―BC(一七、五〇)

七月廿五日(晴)八峰下半及BC撤収

小林、川島、ニ木、BC(七、四〇)―一、二の

コル(一〇、〇〇)―一峰(一〇、二五)往復―

五峰(二、五〇)―五六のキレット(二、二、三五)―BC(一三、〇五)BC撤収(一五、二〇)―

三田平(一七、四〇)

七月廿六日(晴)江山縦走

三田平(七、一〇)―別山衆越(七、五五)―

雄山(一〇、三五)―ザラ峠(一五、〇五)―五

色原(一六、〇〇)

(3)

南沢集結、南沢出合より五百米上流にBC
細野より食料荷上げ。

家田松久大島細見坪并丸山庄司

OB大久保 四宮は二六日大町にて合流

七月廿六日 細野→大沢小屋

七月廿七日 針ノ木峠を越えて南沢へ飯

バーチイと同時(一六四〇)着く。

2. 飯バーチイ

七月廿七日 五色原(一二二五)→川母峠(

一三三〇)→平小屋(一四五〇)→南沢(

一六四〇)

七月廿八日 雨の為全員停帯

林、北係死 針ノ木峠を越え下山

3. OB 爾本及伊藤

七月廿七日 富山より江山温泉泊

七月廿八日 ガラ峠を越え平の小屋を乗

て面の島泊る。

七月廿九日 早朝南沢BCへ伊藤運結

後 半

(1) 雲ノ平バーチイ 大島(上)久保、小林近

針ノ木→鳥帽子→雲ノ平→薬師沢→有峰

七月廿九日(曇後雨) 後立山バーチイと

共に針ノ木峠に上り小屋に泊る(一五〇〇)

七月廿日(曇台雨) 針ノ木(八三〇)→蓮葉

岳(九四〇) 道路工事の最中で、北葛葉

越二つ手前の岩降途切別かつけられて

いた。北葛葉越(一二二〇)→七倉岳頂

上にて雨のためルートが分らずキヤン

プ(一七〇〇)

七月廿一日(晴)(一二〇〇) 巻ルートの

分らず暫く探した後、最高英より西北

方に急斜面を下り踏跡を発見。東沢の

蹟(一二五〇)→船窪峠越(一三五〇)

ここからは切別道を進む。船窪岳(一五

四五)→不動南端(一七五〇)→南沢(一九

二〇)→鳥帽子公園北端(一九五五)

(五〇)

(山名について、二四五三、五△のあるのが七倉岳、その西の地間に船窪谷とあるのは誤りで之は東沢の頭、その西が船窪岳)

八月一日(晴)早朝、小林、近、下山

大島、久保(九二五)発、馬帽子小屋(一〇、二〇)→東沢乗越(一六二五)水宮小屋跡(一七三〇)、ここで東沢パーテイが教時間前通過した跡を見出す

八月二日(晴)黒岳往復、(八五五)発→植又岳(一〇、二〇)之より愛の平に進む、草原と植松の中の散岩は牧場に遊ぶ牛を思わせる。ケルンの導くままにこの牧場の中を登って、本洞な南坡に出れば、まるで天下の名園でも通っている様である、二四六三、九△(一四、二五)→黒部川(一七、五〇)→薬師沢(一九三〇)

八月三日(晴)(一一四〇)発→兼師沢(二二八二)(二六、五〇)→太郎山→太郎小屋(二七、三〇)

八月四日(曇)(七三〇)発→真川(九三〇)→小畑尾峠(二二〇)→有峰(一五、〇〇)

八月五日(雨)(七一〇)発→大多和峠(八四五)→神岡鉱山軌道土駅(一三三五)

輕便に便乗、高山線橋谷駅より帰阪、東沢パーテイ、東沢巡行、表録座敷走

(2)

家田(七)如藤、細見、丸山庄司

昭大久保、伊藤、岡本

七月廿九日(雨)雲ノ平、後立山両パーテイを送り出した後(一〇、三〇)BC教、牧ノ平ノ小屋(二一四〇)→黒部中廊下地行、雨の鳥(一六〇〇)二つ目の沢を渡った所でキヤンプ

七月卅日(一〇、三〇)発、東沢出発(一五〇〇)で雨のためキヤンプ

七月卅一日(八四〇)発→東沢通行(一八、二〇)キヤンプ(三三〇米附近)

八月一日(九四五)発→東沢カール池(二一、一五)(一一、〇五)左側から大きな空襲機が入つて来ている所で二隊に分れ、如藤

大久保、細見は源流を、家田、伊藤、

両本、左司は雪染をつめた。東沢来越は雪溪上端である。赤岳と水呂向のユルで合流し、三候蓮華へ向う。ニこで大久保及左司は水雪岳(一五、〇五)往後す(一七、〇〇)蓮華小屋着。

八月二日 (八、五〇) 発一双六小屋(二〇、三〇)

一樞天岳(二〇、五)一捨ノ肩(一五、一〇)

一本槍柱後(一六、三〇) 両本、伊藤

捨天より下山

八月三日 (七、四〇) 発一中岳(八、三〇)

キレットを下る頃より雨が降り出したので最低鞍部(一〇、二〇)より樞尾本谷を下る。洞天出合(一二、〇〇)一岩小屋(一三、〇〇)一徳沢(一五、〇〇)

八月四日 上高地より下山、

後立山パーテイ 針ノ木一白馬縦走

川島(七)ニ木北條坪井松久、四宮

七月三十日 (曇後雨) 針ノ木小屋(八、三〇)

一針ノ木岳(九、二〇)一スバリ岳(一〇、一〇)

一赤沢岳(一二、四五)一鴫沢岳(一三、五五)

一岩小屋沢(一四、三五)一穂沁小屋跡(一六、〇〇)

冷送行く予定であつたが四宮不調の爲、ニこでテントを張る。

七月廿一日(晴)(一三、三五) 発一針子岳(一三、〇〇) 冷小屋(一四、〇五)

(一四、四五) 縦走を続ける川島外三名は

ここから下山する松久、四宮に見送られて出発、鹿島北槍(一七、〇〇)一キレット

小屋(一八、〇〇)雨が降り出したので小屋

に泊る

八月一日(晴)(七、〇〇) 発一五竜岳(九、五〇)一鷹松小屋(一四、〇五)一不帰キレット

ト(一六、三〇)一天狗の泊場(一九、〇〇)

八月二日(晴)(一三、〇〇) 発一白馬頂上本

テル(一四、二〇)一白馬岳往後一白馬尻(一八、二〇) 北股水電取入口(一九、三〇)

八月三日 細野を経て四谷より帰阪

八月十二一十八日 捨岳一常念岳一大滝 住吉

九月一―三日 比良堂崎岳北面カレ

大久保、久保他二名、ジエーン台風に遭
候し這々の体で逃げる。

九月二、三日 六甲五助谷―紅葉谷道―有

馬、宝塚へ 大久保、大島、久保

十月八日 六甲座頭谷―最西峰―射場山―

紅葉谷―墓滝七曲滝―六甲駅

大久保、久保

十月八―十日 鈴森合宿

先発隊 家田(七)―宮本、林、堀田

後発隊 川島、浜崎、多喜乃、向

井、四宮

八日 (晴) 九時先発隊奏町発、

藤内次出合若小屋に泊る

九日 (曇後雨) 先発隊は前尾根から御

在所頂上に立つ、午後雨の中を後

発隊到着

十日 (小雨) 後発隊は前尾根より御所

所へ、先発隊は藤内道をトラハ

スしよつとしたか雨でぬれていた
ので中止して前尾根を後発隊の後
を待つ。

十一日 (雨) 雨の降、後社川下りを断

念し、下山す

十月廿二日 追場百丈岳

大島、家田、久保、山本、二本、川野、

坪井、細見

十一月一―七日 飯岳 尾藤他一名

一日 (快晴) 十九時大阪出發

二日 (晴) 富士山麓、四時頃逗分小屋

着

三日 (晴) 六時半出發、美松坂より

雪を見、天狗原では二、三尺よく

クラストしている。雷鳥次の途中

よりアイゼンをつけ十二時半架越

小屋着、積雪二、三尺

四日 (ガス烈風) 七時頃小屋を出、

鉢沢小屋を経て別山尾根に出る。

ザクザクをのせた遠松岩角を越えて
十時過前飯の頂上に立つ。天候悪

化の爲引返し茶越小屋に帰る。

五日(曇カス)下山。雨の爲地獄谷湖

六日(雨)七時小屋に分れて、股まで

もぐり下らんとんと下り、その夜

七時半富士山麓にて大阪に向つた。

(尾藤記)

十一月十九日 東六甲

OB 大久保、川島、他一名

十一月廿三日 仁川ムーンライト 川島

十二月三日 仁川ハットレス其他

OB 大久保、林、大村、川島

冬

山 杓子 双子尾根

一隊 家田、細見、川島、尾藤

二隊 大島、如藤、佐吉、坪井、田島

三隊 四宮、山本、大村、近、岡田

篠田先生

十二月廿二日 家田、如藤、大島、大阪路

廿三日 家田等細野着

先着の細見、四宮は北股水電取入口小屋

へホツカ、川島、田島、坪井、尾藤、林

大村、近、山本、岡田、大阪発

廿四日 家田、大島、細野↓惣倉↓北

股、午程如藤、四宮、細見、尾藤、田島

川島、坪井、北股へ、大島、細野へ下る

山本、大村、近、岡田、林はスキ合宿

に入る。

十二月廿五日(高曇) AC設置

一隊及、如藤、坪井、四宮

北股(八、三〇)―惣倉(一〇、三〇)―二三〇)〔

小日阿コル(二四、〇〇) AC設置、一隊 AC入り

如藤等北股に下る。田島は北股より細野に

下り、大島、佐吉と共に北股へホツカ

十二月廿六日(曇)

一隊 偵察の爲前進したが視界悪く遠く

引返し二隊を廻え入れるためAC横に懸

洞を依り之に入る。

二隊 北隊(二二〇〇)―猿倉(一三〇〇)―
一四〇〇)―猿倉台地(一六〇〇)―ラッセル
ル甚しく引込し―猿倉(一七〇〇)―
四宮、北隊より細野へ下る。

十二月廿七日(風雪)

一隊、食糧欠乏の恐あるため下山せんと
した(二〇三〇)が、雪崩の危険を考えて
引返す。

二隊 猿倉(九〇〇)―猿倉台地(二〇二〇)―
腰返のラッセルに陥みつつ登るも視界悪
くルート不明の爲引返す(二二二〇)―

猿倉

十二月廿八日(晴) 一、二隊天替

一隊 AC(九四〇)―猿倉台地にて二隊
と会う(二〇三〇)―猿倉(二二〇〇)―三〇〇)
―北隊(二四〇〇)

二隊 猿倉(九〇〇)―AC(一一三〇)

一隊の作った壺洞が天井沈下甚しいため

新に壺洞を掘る

十二月廿九日(快晴) アタック

一隊(川島を除く) 北隊(七二〇)―AC
九四〇)―二隊に追付く(二〇三〇)―
二隊 AC(七三〇)―スキーテボ(八〇〇)―
一馬部のな天候激変に会い引返す(二〇
〇〇)―一隊追付き共に再び登頂(二〇三〇)―
―真双子ユル(二二三〇)―昼食―シヤマンク
シヨン直下(二四三〇)―時間が遅いため引
返す、―AC(二七三〇) 家田、尾藤、佐
吉は北隊へ下る。(一九三〇)

三隊 細野(二三〇〇)―北隊(二五三〇)―
川島、北隊より下山

十二月卅日(曇後雨) AC撤収

家田、尾藤、山本、疋、大村、北隊(八四〇)―
―AC(二二三〇)―如藤等五人と共にラント
撤収―北隊(一九〇〇)

篠田先生、荏吉、四宮は北隊より下山

十二月卅一日(曇)

近、大村、田島、山本、岡田下山

一月一日(大雪)別撮収

家田、大馬、加藤、尾藤、坪井、細見

下山

又キー合箱

四宮、大村、林、山本、岡田、近

二月廿四日(雪)細野到着、午後又キー練習

廿五日(曇)直層降斜層降練習

廿六日(雪)ホーケン練習

廿七日(雪)烈しい降雪中で練習

尚後半は双子尾根報告に並記す

廿八日(晴)黒菱往復、篠田先生同行

細野(一〇、五〇)一馬止小屋(一二、〇〇)

一黒菱小屋(一四、三〇)一五、三〇)一細

野(一六、三〇)

林帰成す

一九五一

(五六)

一月一日-五日 神域及細野又キー! 久保

二月四日 伊吹又キー行

二月廿一日 木川バツトレス其他

田島、山本、坪井、宮本、川崎

三月四日 大甲保疊若登攀並西山谷下降

大崎、徳永、田島、大村、山本、林、近

川崎

三月十三日-二十日 志賀高原発着又キー練習

久保他四名

春 山 後立山逆縦走 三月十七-廿一日

A隊 如藤(上)、川崎、坪井、OB大久保

B隊 徳水(上)、松久、細見

C隊 大島(上)、尾藤

三月十七日 B隊大阪発

十八日 B隊大町より麓野へ

十九日 而脱より冷小笠原上、カスノ鳥

被線直下に荷を置き、大町泊

(A隊)大阪飛

三月廿日(晴)(A隊)早朝大町着、B隊の細

見を和え(二五三〇)大町発(バス)一六

出(二六〇〇)一 大沢小屋(二四〇〇)

(B隊)細野へ

三月廿一日(晴)(A隊)林養、(B隊)鹿野泊

三月廿二日(晴後雪)(A隊)大沢小屋(四

〇〇)一 針、木峠(八〇〇)一 針、木岳(

一一〇〇)一 坪井スリツプ真傷(二二二五)一

以收迄(二六〇〇)(B隊)二股まで往復、

鹿島泊

三月廿三日(雪後曇)(A隊)疏(二六〇〇)一

大沢小屋(一九〇〇)

如藤、細見連絡の爲下山(二四、二五)

(B隊)鹿島泊在、丸山に遊ぶ

三月廿四日(晴)

如藤、細見、大町着(五、一〇)

(C隊)大島、早朝大町に来る

相談の末、如藤、細見は冷へ連絡の爲(一

七三〇)大町を發つ、大島は丸山在司を伴

い大沢へ向い、三ヶ沢より少し上手の管林

小舎にて休憩

一方大久保、坪井、川島は一三、四五大沢

にて時頃三ヶ沢近くを通行中、大島、在司に

飛見され小舎に入つて休む

(B隊)鹿島(四〇〇〇)一 二股(六〇〇)一 長

サク沢一冷小舎(一〇、三〇)

三月廿五日(晴)(A隊)管林小舎(二四、二五)

一 大町(九〇〇)大島、在司は今朝到着し

た尾藤と共に細野へ、大久保、坪井、川島

は大町泊、如藤、細見は：鹿野(五、二五)

一 冷小舎(二、二五)

(B隊)冷小舎より鹿島檢往復、如藤、細

見より事情を聞き直ちに下山

三月廿六日 坪井、松久を除く全員細野へ

坪井、松久は大町泊、廿七日帰阪す

三月廿七日(雪)林養、ススキー練習

三月廿八日(雪)徳氷、和藤、細風帰阪

三月廿九日(曇後凡雪)残つた大久保、大馬

尾藤、川島の人を八方尾根より恵松、白

馬の縦走を行はんと(九〇〇)本発したか

芽之ケルンより風雪烈しい為返却、細野へ

帰つた。

三月三十日(曇) 全頁帰阪

三月二十九日(曇)四月七日 初池、蓮華温泉、

白馬、久保、

三月三十日、工学部、阿部、安宅、教授のお

供をして森上より梅池ヒユツテに至る、

三月廿一日 三人にて茶鞍に登る、

四月一日、蓮華温泉行、二十九日大池附近で

行方不明となつた攝師ニ名に對する捜索隊(

ガイド連)の後を彌兵衛次ルートより單身

追いかけて、蓮華温泉にて合流し炊雪の中を

茶鞍次ルートに登り梅池に帰る、

四月二、四日 悪天の為滞在、四日午後晴向

に茶鞍天の上部へ捜索に行く

四月五日 白馬單行。早朝から後野天張凡

午後曇(四四〇)小倉発天狩保、茶鞍(テ

ホ)小蓮峰をへて白馬頂上(九、三〇)、

直ちに引返し小倉着、一時、三時小倉発、

落倉ヒユツテ新田より松川橋をへて細野六

時半

四月六日 細野発、七日帰阪

四月一四、五日 道場キヤンプ

山本、林、近、家田、川島

四月三〇日(曇)五月五日 鈴鹿山行

川島、林、大村、北川、細尾

四月三〇日(晴)湊町(八四五)湯山(二四〇)

北谷藤内沢出合BC(一四〇〇) 前尾根

御在所岳BC(一九〇〇)

五月一日(晴)藤内沢―ジマンタルム―御在所

岳

五月二日(晴)BC(七三〇)御在所岳―鏡岳

―鏡尾根―水沢峠(一二三〇)―松尾川(一九

〇〇)―大河原(二二、〇〇)泊

五月三日(晴)大河原(八〇〇)―松尾川―商

宅岳(二七、〇〇)―物峠―水富谷―尻(一九三)

五月四日(晴)尻撤収(九〇〇)―駿知川―

セト峠出合(一七、〇〇)

五月五日(晴)セト峠を越え永源寺を経て八

日市に出・帰阪

五月一日―五日 丹波高原、大堰川源流よ

り由良川源流へ、久保、並

一日 京都―(バス)―大布施―能見―

フカント谷水源

二日 天狗峠―天狗岳―大谷―ホケ谷下

降―由良川

三日 由良川源流溯行―中山―三国峠△

往復

四日 傘峠往復―ケヤキ坂―須後―芦生

上流

五日 田歌―(バス)―和知駅より帰阪

一昨耳のヘスタ―昨耳のジエーンと荒ら

された丹波高原は交通機関が興まで入る様

になつた事とあいまつて、以前の興原しさを

よほひ失つた様に思う、惜しい

五月十二―十三日 六甲大月谷新人観迎キマ

ンブ

篠田先生、家田、加藤徳永、大詰、住吉

尾藤、細見、久保、山本、四宮、川島、林

紅、田比沢、(新人)浅野、広橋、実戸

六月二―三日 比良奥の深谷より武奈岳、

久保、川島、並、北川

六月九―十日 道場 二本、北條、坪井

六月十七日 仁川バツトレス其他

久保、川島、山本、宮本

七月七―八日 道場

篠田先生、山本、林、辻川、北川

夏 山

カク木里合宿 七月十八―八月一日

家田(七)、久保(五)、住吉、細見、二本、山本

五、杯、大村、実戸、広橋、北川、辻川

(五九)

以上十三名

七月十八日 大阪船

七月十九日 (晴)

細野 (一、三〇) - 黒菱 (六、二〇)

七月二十日 (晴後曇) 夕刺雷雨

黒菱 (八、三五) - 厩松 (五、三〇)

七月二十一日 (晴) 高夏松き衝雲

厩松 (八、四〇) - 毎岳鞍部 (二、五〇) - 白

岳下群、カクネ守の沢出合下手左岸BC地 (八、〇〇) 出合の境かまた出て居らず大川に助かる。

七月二十二日 (曇) ガス去来

午後アリセード練習、家田、久保、住吉、

細見、ニ木の五名の双天有尾根偵察

七月二十三日 (晴後曇) 午後雷鳴を聞く

◎直接尾根、細見、ニ木 (C) 本文、頁参照

BC (六、三〇) - 洞窟尾根未端 (七、五〇)

一尾根取付 (一、三〇) - ビトン脱逃の途

ニ木墜落、逆却す。

(天)

◎洞窟尾根、家田、山本 (C) 二十四日の環

◎キレット沢降路雪溪より南捨往復

久保、住吉、近、林、大村、穴戸、広橋

北川、辻川

BC (八、二五) - キレット沢候入口 (八、五〇)

主後線 (十一、二五) - 南捨 (二、〇〇) 引返し

一北捨 (二、五〇) - 雪溪下り口鞍部 (四、〇〇) BC (五、三〇)

七月二十四日 (曇) ガス去来、午後遅く驟雨

◎P、リッヂより扇形残雪トラバースによる天

狗尾根、住吉、林

BC (六、四五) - 扇形の候よりP、懸の取付

(八、一五) - Pを登リトラバースして一

且扇形残雪下ルンゼ中段テラスに出る (一、五〇)

再びP、鞍中を直登、扇形残雪右

横に爪 (二、五〇) 残雪を左へトラバース

の後直登天狗尾根 (二、一五)、昼食、小舎

岩 (三、三〇) - 第二岩峰上 (三、五〇) - 北捨

(五、〇〇) - キレット小舎 (六、〇〇) (林)

◎洞窟尾根

久保、近、広橋

BC(七、〇〇)―取付(八、四〇)―葎上(一〇、〇〇)―第一岩峰(一〇、三五)―再び葎象(一、二、二五)―(二、〇〇)―主稜線(二、三、三五)

BC(二、五〇)

◎岩登り練習

残り全頁

BC向い右岸の岩壁にて

七月二十五日 朝曇曇、後晴、午後相当な夕立あり

◎直接尾根

家田、細見、ニ水 (cf 本文知頁)

頁)

BC(六、五〇)―取付(二、〇〇) 岩頂しろく

遙却(一、三、三〇)

◎キレット沢右尾根

林、大村、北川

BC(九、三〇) 尾根取付(一〇、三〇) 葎食

(十三、〇〇) その上は五米位の葎直のフェ

ースで中継にテラスがあり、その上は刀

ブツで巻る、テラスから左上の木につか

まつて登り、葎物は後でつり上げたので

一時半を消費した。(二、〇〇) 雷雨のた

め(五、三〇) 引返し、途中よりキレット

葎壁に降りて下る。BC(八、〇〇) (林)

◎大川沢言松窪手前附近往復

久保、山本、近、穴戸、辻川

BC(九、二五)―右岸下降―白岳沢との出

合(一〇、〇〇)―蘆松窪手前引返し(三、

〇〇)―BC(一、三〇)

七月廿六日(晴)

◎P₁リツケより扇形残雪トラハースによる天

狗尾根、家田―近 (cf 七月廿四日の項)

BC(八、〇五)―P₁下取付(九、〇〇)―扇

形残雪右横(一〇、四〇)―扇形残雪上側

岩壁をトラハース、扇残上ルンセ滝の右

側より上部に出んと志したるもオーバ

ハンクに阻まれて果さず、扇形残雪に下

る、天狗尾根(二、四〇)―小屋岩下(一、

〇〇) 残雪左横バーテイルを待てる(三、三

〇) 合流―荒沢頭(四、三〇)―五、〇〇)

キレット小屋(六、一〇) 家田、久保、洞窟尾根パーテイを(七、三〇)迄行つて其に下る、山本、近下リ既(八、〇〇)

(近)

④ 鞍部残雪左抜より天狗尾根 久保、山本 鞍部残雪とは扇形残雪とは別に、天狗尾根最低鞍部下にあるやはり扇形をなした残雪でこれより落ちるルンゼは扇形残雪より落ちるルンゼと同じ雪溪の候(扇形残雪の候)左端へ落ちる。鞍部左抜は取附の岩壁をのぞいては大部分藪と草附ではあるが急な鳥洞窟尾根等よりは凶難である。既(八、〇〇)―扇形残雪と鞍部残雪との向より取附かんとしたが、縁割れと岩壁で取附けす候の左端より取附く。約一ピツタの岩場でリツゲに出る。フツシユ中の登攀、ルートを求めて左へトラハリス後直登して白色の岩につきあたる。右側とまぐ、岩の上を長く地衣類がおほつ

(六三)

た急傾斜、決して右側の薄状の草附に入り登りつめてリツゲに出ると鞍部残雪左抜であつた(十二、〇〇)―天狗尾根上(十三、三〇)、荒沢偵察をかね天狗鼻の方へ何う。(一、四〇)天狗鼻手前にて引返す。(三、三〇)家田パーテイ―と合す。

⑤ 洞窟尾根 任志、二本、細見、大村、

穴戸、北川、辻川

既(九、〇〇)―取附(一〇、〇〇) キレット小屋(七、三〇)

七月廿七日(快晴)

⑥ キレット尾根 家田、林

既(一〇、一五)―洞窟尾根との向の雪溪に入り左側の稜に取附く(一一、三〇)―岩塔の頭(二、〇〇) 右側の雪溪へ下り小屋への候を求めてキレット小屋へ入る(三、〇〇)

(林)

⑦ 山本、広橋は雲ノ平行計画の爲、大阪よりパーテイ―と大町で落ち合うべくキレット

決より下山

◎休養 残余

下流左岸で水昌掘り

七月廿八日(快晴)

◎蝶型岩壁左核

(cf 本文 39 頁)

家田、林、久保、大村

B₁ (六三五) - 洞窟尾根下端 (七四〇)

P₂ P₃ 洞窟溪に入りスラアでアンサイ

レン・天井ルンゼ (一〇三〇) 昼食 - 左核

上 (一三〇〇) サイルを解く・天狗尾根へ

(一〇五) - 北槍 - キレット - BC (五〇〇)

◎五龍岳往復 道、北川、北川

BC (七三〇) - 降路雪溪最上部で右候を

つめ核線 (九四五) - 五電頂上 (一三三〇)

(一三三〇) - キレット沢下り口 (六〇〇)

BC (七〇〇) (北川)

◎蝶型岩壁右核 住吉、細見、二本

クレバスに阻まれ取附し得ず引違す

七月廿九日(晴) 断壁

撤収、出発 (一〇、〇〇) - キレット沢登りの

途中小事故で負傷者が出たため、道、林、

北川、北川は冷送、残余はキレット小屋泊

七月三〇日(晴) かす去来

冷を経て下山、道、林は歸阪、北川、北川

は大野で一泊の後美ヶ原へ、残余は細野へ

七月三十一日(晴) 断壁、

細野迄

八月一日 歸阪

八月十三日 二十日、妙高火山群、久保軍根

十四日 田口、笹ヶ峰

十五日 高谷池、黒沢池をへて、長助池よ

り直接とりつき、地図に露岩記号ある岩壁

下に出で、これを登り北肩に出で妙高に達す

歸路は北國奥線路通り

八月十六日 火打をへて焼往復

十七日 乙尾山峠を越え小谷温泉へ

十八日 群刺道上部がレ記号の所より尾

根に取付き、天狗原山、金山、葉倉尾根を

へて爾節山に達し、樺山新湯に下る

八月十九日 山口よりバス糸魚川へ二十日帰致

八月 尹聰 大崎他一名

八月 塩見、赤石、徳永、松久、大久保

太田敦氏

三伏峠―塩見狂後―荒川岳―赤石岳―

二野小屋―甲府

集会記録

(一九五二―四―一九五二―九)

校友会分散しているので毎金曜日毎五時半

より日本山岳会支部のルームで集会を行つて
いる。

四月十三日 香山報告会

四月二十日 集会方針の評議等

(六四)

四月廿七日 山行計画発表等

五月十一日 鈴鹿及丹波高原報告(川崎、

久保)

五月十八日 「日本初期山岳文典紹介」

(篠田先生)「山行の適性に就いて」

(細貝)

五月廿五日 「高山観に就いて」(小沢)

六月一日 「ラゲウ入使用上の注意」(久

保)「カクネ里の概念」(家田)

六月八日 「雪の物理的性質」(二本)

今西光華に未だ頂きカクネ里につき質問
す。

六月十五日 「岩登り術の基礎」(川崎)

六月廿二日 「登山靴・ヤッケについて」

(田島)

六月廿九日 「弊崩の概念」(山本)

七月六日 「山の気象について」(坪井)

七月九日 「登山家の常識としての救急処

置」(大久保光華)

七月十三、十五、十七日 夏山準備会

八月十日 簡單な夏山報告

八月二十日 シュライフカツク購入の爲緊急

集会

八月廿四日 集会方針について討議

九月十四日 夏山報告会 於学生課屋上ホール・篠田先生、岡先生出席

九月十九日 水野詳太郎先輩に帰朝談を聞く

会・於病院恵有田。日本山岳会と共催

編集後記

○ 編集スタッフが不馴れなものでばかりであ

ったので、秋及冬の三四にわたる北沢行に

参加した爲に、九月以来遅延に遅延を重ね

を重ねた差す号発行し、徳永・大島両兄の

御援助により漸く実現されることになった。

○ 今号では特に取上げる程の登攀実績がな

かったので、我々の登山に對する思案的な

面を出す事を主眼としたが、教多い山行記

録と大島兄の「我等の歩み」から、我々の

山に傾けた情熱と努力をくみ取って傾け

は幸である。又この一文は、会創立以来三

年に亘んとし、当時の会員が怨んど現彼を

退こうとする今、時宜を得たものである。

対外的のみならず、対内的にも若い会員達

が阪大山岳会に於ける自己の尸史的位置を

はつきりと認識する上に一つの手掛となる

からである。

○ 会員の原稿は多数に上つたが、前述の編

集方針の爲削り或は除いたものが多い。こ

の呉寄稿者の御了承を乞う次第である。

(K)

昭和廿七年二月廿五日 印刷発行

大阪大学山岳会「時報」第三号

発行所

大阪市北正堂ビル前物産ビル三階
大阪大学山岳会

編集責任者

大阪大学山岳会内
川島勇

印刷所

大阪市西正江戶堀北通三丁目一七
美研社
電話土佐堀五〇〇八番

正 誤 表

頁	行	誤	正	頁	行	誤	正
1	下 1	第七号	第三号	29	上 5	唇れす	唇れす
2	下 1.4	山丘部	山岳部		16	ツツシユ	アツシユ
3	下 3	そこへ入って	そこへ冬入って		下 12	脆岸	脆岩
	4	北丘	北岳	30	上 14	北嶺	北嶺
4	下 左端	A方尾根	ハ方尾根		18	岸壁	岩壁
5	上 7	庵	滝	31	上 17	カク方里	カクネ里
6	上 13	違めることを	違の こゝを		下 1	フレバース	クレバース
	" 19	不帰と	不帰を	32	上 18	カイネ	カクネ
7	上 2	牛首岳	牛首岳	34	上 9	現大阪	現阪大
	下 15	雪沢	雪溪	35	下 4	当り	辺り
8	上 7	個沢	涸沢	37	右端	家田千尋	小谷部全助
	下 12の次に		② 法人 46号	38	左端	小倉岩	小倉岩
9	上 2の後に		法人 47号	39	下 6	縁割れ	縁割れ
10	上 1. 6	杓子尾根	杓子尾根	40	下 13	突は	突は
	2の次に		大島輝夫	41	上 16	G D	直接尾根
	8	三枚ベニヤ	三枚ベニヤ		下 16	日本アルプスキでも	天気が日本アルプスキでも
12	下 5	小倉	冷小倉				
	7	換板	透板	42	上 3	ラッセル終始	ラッセルに終始
13	上 8	試みに	試みた		13	カ工支援	カ工支援
	13	斜面と	斜面を	44	上 5	学生	学制
	15	丁の	丁の		下 16	東谷	東天
	下 8. 13	小倉	小倉	48	下 1	中腹	中腹
	14	稜頂	稜線		4	裂俊	裂傷
14	下 16	出るべきもの	出るべきものは	51	下 12	出巻	出合
15	下 11. 12	マル	ゴル	54	下 9	木村	大村
	13	ハンドボール	ハンドホールド	56	下 2	神城	神城
16	上 2	がしていて	がれていて	64	下 5	細貝	細見
17	上 8	薄かった	薄かった	65	上 8	祥太郎	祥太郎
	11	休んだ	止んだ		13	重ねを重ねた	重ねた
18	上 1	関学 浪高	関学、法政、浪高	66	3	協館ビル	協銀ビル
	11	匂う	匂う				
	14	狭められた	狭められた後				
	下 9	黝ん岩壁	黝んだ岩				
19	下 7	スノーブリッジ	スノーブリッジ				
	19	近くにあると	近くに来ると				
22	上 15	ガリー北嶺	ガリーが北嶺				
24	上 5	甲南氏	甲南閣氏				
26	下 3	脆く	脆く				
28	下 6	岸壁	岩壁				